GAPニューズレター ●UFOと宇宙哲学の研究誌●49

GAPニューズレター第49号目次

なぜ彼らは来るのか（完） F・ステックリング 1
生きるための助言 ・・・・・J・クリシュナムルティー 10
アダムスキーの思い出 ・・・・・・アリス・ポマロイ 20
或るアドバイス ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
<改訳>空飛ぶ円盤同乗記（2）G・アダムスキー 26
「声」。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。 34
月例研究会案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36

GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で，世界中の人々が空飛ぶ円盤の真相について〝知る〟機会を与えられるべきであるという見地に基ずいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました．彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して，来たるべき時代に眼を転じること，人間はすべて〝コズミック・パワー〟の御子であり，そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました．この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた〝生命の科学〟の研究と理解を通じて体得できるものです．

日本GAPの目的は円盤とスペースブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり，奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります．その中心思想は次のとおりです．

1．この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある．
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており，危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている．官民を問わずスペースブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが，通常その真相は洩らされていない．
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は，人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である．

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく，政治・宗教と関係のない非営利刊行物です．本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです．

◎GAP参加グループを有する国は次のとおりです．
アメリカ，オーストラリア，ベルギー，ブラジル，カナダ，デンマーク，イングランド，フィンランド，ドイツ，オランダ，インドネシア，日本，メキシコ，ノルウェー，スエーデン，スイス（ABCの順．1971年6月現在）

◇表紙写真はアダムスキー撮影の金星の母船。円盤を二機発射したところ。右下の黒い力ゲは望遠鏡の筒。

◇本誌掲載記事はすべて翻訳転載権取得済。禁無断転載。

なぜ彼らは来るのか（完）

フレッド・ステックリング
久保田八郎訳

第10章　質疑応答(3)

問　地球では人口過剰の問題がやかましく論議されています。スペースブラザーズ—たとえば金星人などは—この問題をどのように処理していますか。

答　以前にも述べましたようにスペースピープルは自分の肉体をよく知っていますから、肉体内で発生する事柄は何でもよくわかります。彼らはわれわれが言っているような〝偶然の妊娠〟をやらないのです。

ところで人口過剰とは何を意味するでしょう。これは実際には土地と食糧の配分に関する貧弱な政策にたいする言訳ではないでしょうか。この地球上には未開発の肥沃な土地がまだ数百万平方マイルもありますから、それが正しく利用されるならば現在直面している人口の三倍の人間を維持することができるはずです。海の資源を十分に利用するならばまだもう十億の人間が養えるでしょう。私は過去に数度米大陸を横断しましたが、アリゾナの広大な土地を忘れることはできません。そこでは五万エーカーの土地のどまん中にたった一頭の牛が立っていただけです。一方ニューヨーク市では一千万の人間が互いの頭上に住んでいるのです。インドすらも適当に配分して灌漑するならば全国民に利用できるほどの十分な土地があります。人間が自然の法則に身をゆだねさえすれば、自然はいつも万物の世話をしてくれるのです。

一九六七年三月五日号のワシントン・ポスト・パレード誌は「動物の〝人口統制〟」と題して次のような驚くべき報告をしています。

「動物学者たちは動物が一種の自然の産児制限を行なっていることを発見した。動物の群れが〝人口過剰〟の状態になると自動的に出産がまばらになってくるのである。動物が示してくれるこの教訓は人間にとっても全く有益である。自然は〝人口過剰〟にたいして自動的なコントロール機構をそなえているのであって、人間と異なって動物は自分の本能

に従っているのである」

問　故障を起こした飛行機が燃料を使いつくして数時間後に完全な着陸をしたという報告を聞くことがあります。これは宇宙人が遭難を援助したのですか。

答　そうです。スペースブラザーズはこのような事故の付近に偶然居合わせたときはいつでも援助します。私は第二次大戦中にこうした事件が戦争に関係した数ヵ国の軍用機に発生したことを聞いています。これは現在も民間機に起こっています。

以下はある軍用機パイロットから出された報告で、この中で彼はイングランドに駐留中にこの種の奇跡が発生したと述べています。――一機の爆撃機が行方不明になり、英仏海峡の上空で撃墜されたと報告されました。しかし燃料が切れた後になって帰って来ました。パイロットの話によると、その爆撃機はヘリコプターのように非常にゆっくりと非常に静かに空中に落ち着いて、〝目に見えない手〟で滑走路におろされ、静止したあとでばらばらにくずれてしまいました。こわれた爆撃機の乗員は無傷のままで出て来ましたが、それによるとエンジンの全部がしばらく故障していたので全然飛行はしなかったということで、機体は「巨大なマグネチック・エレベーターの中に積まれているような感じがして、それによって運ばれて来た」と言っています。この理由は次のとおりです。この事件の場合は一種の〝マグネチック・エレベーター〟で基地まで運び返されたのであって、そのエレベーターは四本の放射線から成っており、その放射線の先端は内側に曲がっています。この放射線は肉眼には見えませんが完全な固体です。スペースピープルはこの方法で多くの国の飛行機を助けたのですが、それは彼らが差別をしない理由にもとづきます。

この事件と酷似した別な事件があります。これはかつて世界中の新聞に報導され、ライフ誌にも掲載されました。百名以上を乗せたある巨大なジェット旅客機がサンフランシスコ上空で右エンジンと翼の三分の一を失いました。火を吹いたエンジンは人口密集地域に落ちましたが、数戸の民家のうしろの広場に落ちたために家や人命に別状はありませんでした。右翼の一部分も同じ地域に落ちたのですが、やはり人を傷つけることはなく、鉄道の広場に落下しました。ジェット機はサンフランシスコ近辺のある空軍基地へ緊急着陸しました。私はその事故後に行なわれた乗組員のテレビインタビューのときの話を聞きましたが、一体翼の一部やエンジンを失った飛行機を着陸させることが可能かどうか、こんな場合にそなえて特別な訓練を受けたのかと質問されたパイロットは、次のように記者団に答えました。「みなさんはエンピツなしに文字を書こうとしたことがありますか」彼はこの事件が全くの奇跡で、着陸するまでに飛行機をコントロールすることはできなかったと述べています。

問　地球の人工衛星やロケット類の不思議な消滅や再出現とUFOとのあいだに何かの関連がありますか。

答　私は時折宇宙人から聞かされましたが、それによると彼らは地球の人工衛星の内部装置を調べるために衛星を軌道から取り除いたことがあるそうで、ときには必要とあれば修理もするということです。地球から人工衛星を打ち上げて、それが電波を発射しながらも信号を送り返さないという例をわれわれは聞いたことがあります。実際、完全に失われた衛星が一週間ばかり後に突然地上の追跡基地のスクリーンに姿を現わして、しかも完全に作動していたために科学者を驚かしたことがありました。ここに一九六七年九月二十七日付のワシントン・デーリー・ニュー

ズ紙に出た記事があります。「初期の実験衛星――海軍の電波宇宙船トランシット4B――は一九六二年に打上げ後六ヵ月で行方不明となったが、その後不可思議な生還をし、その信号は目下〝大きくはっきりと〟受信されつつある」

問　円盤や母船を地球のレーダーで追跡することができますか。

答　相手がそうされることを望んだ場合はできます。しかし円盤や母船は船体周囲の光線を曲げることによって船体を見えなくすることができるのです。そうするとレーダーの波は反射しません。ときには宇宙船がしばらくのあいだレーダーに映ることがあり、それから急にパッと消えますが、これはものすごいスピードのためです。

これらのことはアインシュタインの〝統一場の原理〟をよく知っている科学者には異常な事ではありません。一方われわれも従来の飛行機で飛んでレーダーの探索からのがれる方法を知っています。英空軍が数年前に発表したところによると、彼らは米国のレーダーに捕えられることなしに米国の各地上空を飛んだということです。これはある有名な航空雑誌に載った記事ですが、これが可能な理由は、近時発明されたある装置をジェット機に積み込んでいるためで、それによってレーダーの電波が吸収されて地上へ送り返されないのだそうです。

問　昼夜を問わずに円盤を確認する方法を教えていただけませんか。

答　まず第一に私が強くおすすめしたいのは、高倍率の双眼鏡を入手することです。多数の人が毎日のように六個またはそれ以上のUFOを見ると称していますが、UFO研究家と自称している人たちでさえも遠方のUFOが観測される場合には過ちをおかしますし、高空を飛ぶジェット機や鳥さえも円盤と間違えられることがあります。

私が一九六六年六月に宇宙人から聞いたところによりますと、目撃して報告されるUFOの約七十パーセントは地球の飛行機や気球などだということです。われわれが常に心にとどめねばならないのは、宇宙人は〝絶えず円盤を見ると称する人たち〟のために〝空中サーカス〟をやるために来るのではない、という点です。

かつて述べましたように、この惑星間宇宙船（円盤・母船）はイオン化空気の雲のようなフォースフィールドで船体を包むことが可能です。そのために各宇宙船は昼間は葉巻型・タマゴ型・三角形・ドーナッツ型・アーモンド型の茶色または灰色の雲のように見えますし、夜間はしばしば青・緑・赤などのコンビで見えたりします。もし以上のような雲型の物体が空中に停止していて、しかも他の雲が風で急速に移動している場合は、大体に大気圏外の宇宙船だとみて差支えありません。またはこうした雲型の物体がターンやジグザグや急停止などや、急に時速数千マイルのスピードで逃げたり数秒間でまた姿を現わして消えたりして、知的に操縦される物体以外の何物でもないような飛び方をすることがありますが、消滅したように見えるのは〝非物質化〟するのではなく、機体の周囲の放射線の増加によるものです。

小型円盤はときどき柔らかくてふわふわしたような〝真珠色〟の白色をあらわしたり、ときには虹色を放ったりすることがあります。これも船体を取り巻くフォースフィールドのためです。もしまん中にはっきり見える穴のついたドーナッツ型の雲を見るならば、その場合は底部にある大きなレンズの所のフォースフィールドを取り除いた円盤を見ているわけです。これは乗員がフォースフィールドを通しては外部を見ることができないために、古い型の円盤の中から外部を見るときにはそうするのです。たまにはフォースフィールドを除いた円盤を見ることがあり、船体にマークがついているのが見えることもあります。火星の円盤・母

船には通常底辺のない三角形（∧）またはパワーをあらわす稲妻型のマークがついています。金星や土星の宇宙船は∫という記号が互いに交叉したマーク∮を使用していますが、これは宇宙の一体性をあらわしています。古代ギリシャの文明ではこれと酷似したマークが使われました。金星と土星の宇宙船は二つの手が互いに触れ合っているマークをつけていますが（注‖本誌第四十六号の表紙裏の図を参照）、この場合の掌は宇宙の兄弟愛のシンボルとなっています。

夜間には流星やイン石などがしばしば円盤と間違えられますが、もしそれらが急停止やジグザグやターンをやらないで動いているならば、それはまさに流星そのものです。

問　晴れた空から生きた魚や岩石が降ってくる現象について説明して下さい。この不思議な現象とＵＦＯとに何かの関係がありますか。

答　ときたま宇宙船が地上から離陸する際に岩石やドロがフォースフィールドによって持ち去られることがあり、それが高空に停止して、有視界飛行の目的でフォースフィールドの幾分かを取り除くと、くっついていた岩石が地上へ落ちることがあります。海中潜航型の宇宙母船が海中から飛び出ると、フォースフィールドによって生きた魚がくっついて出ることがあります。これも前記の場合と同様です。そのあと魚は地上へ落ち、ときには荒地のまん中に落ちることがあります。しかし私はたつ巻・ハリケーンなどのような自然力も岩石や魚を運ぶこともあると思います。

問　〝聖なるもの〟という言葉は宇宙人にとって何かを意味しますか。

答　意味します。しかしわれわれが理解しているような意味ではありません。なぜなら金星や土星の人々は極微の原子から巨大な太陽に至る万物を〝聖なるもの〟とみなしているからです。全宇宙は生命の創造主の英知をあらわす聖なる表現です。

宇宙人は（神にかわって）山や水を祝福してそれを〝聖なるもの〟と称することはしません。そんなことをすれば創造主の法則ではなく悪魔の法則を用いることになるからです。いかなる人間といえども自分を自分の創造主の上におくことはできません。彼ら宇宙人は宇宙の最低のものから最高のものに至るまで神がその英知を表現しないものはないことを知っています。したがって〝人間が〟祝福したり聖化させねばならない物は存在しないのです。聖なるものはすでに〝ある〟のです。

第11章　結び

私は読者にたいしてＵＦＯの分野内で発生している物事の深い知識と、宇宙人の来訪に関する真相をお伝えしてきたと思う。

また一般にＵＦＯといわれている物に関するミステリーのいくらかを明らかにしてきたと思う。

私は惑星間航行宇宙船を結局は〝確認〟飛行体として呼ぶべき理由を精一杯読者に与えてきた。われわれは空中や海中におけるＵＦＯ活動の多くの信ずべき報告とともに証拠も持ってきた。そして別な惑星から来るこの宇宙船によって示される特殊な飛行ぶりが今日の地球で用いられている物よりもはるかに進歩した物によることをあらゆる国の政府は知っているのである。

いずれはこの問題に関する多くの情報が権威筋から出されると思う。この慈悲深い地球訪問に関する真相のすべてをいずれ教会が公表するか

どうかを期待する必要がある。教会こそはこれがやれる唯一の機関だと思われる。というのは政府は都合のよい手段を選んだために円盤問題について混乱と敵意をまき散らしたからである。どうもそんなところらしい。

多くの分野におけるわれわれの失敗を宇宙人のせいにして非難することは、地球訪問に関するあらゆる問題が拒否される点にまで大衆をおびやかして逆もどりさせることになるだろう。以上が新聞雑誌によく掲載される最近の記事の目的であるらしい。

しかし私は本書が読者をしてみずから考えさせ、権威筋から公表される情報を最終的回答かつ既成事実とみなさないようにするのに役立ったと思う。権威筋は自分にとって都合のよい事柄を流すだけで、大衆に役立つものは流さないのだ。

本書によって普遍的な理解を広めようとして私は無意識に他人の足を引っぱったかもしれない。その人々は本書に盛られた諸事実がもっとエゴを喜ばせるように書かれることを望むだろう。だがそのような書き方は本書の目的にそわない。真実というものはある人々を傷つけるかもしれないが、その場合は本人たちはその真実に従った生き方をしなかったか、またはそのことに関してはいかなる真実をも拒否したかである。そして「立入り禁止」という看板を戸口にかかげている人にたいしては、いずれ目覚める時が来て、親切な宇宙の兄弟の援助の手を受け入れるようになることが望ましいのである。

私がかなり子供っぽい物語を書いたことや、ばからしく見えるほどの単純な生命哲学を支持しているというので、読者から非難される可能性があることは十分に承知している。そこで、ばからしいと感じる人々にたいしては、地球上で永遠の平和と理解を確立するためのもっとすぐれた方法が他にあれば教えていただきたいと私は謙虚に尋ねたい。建設的な意見なら何でも私はオープンマインドをもって聞くつもりであるし、スペースブラザーズもそうであろうと思う。

本書に述べられた生命哲学は宇宙人からもたらされたものであり、キリストの教えや原理の基礎となるものである。まず自分自身にたいして正直になろうではないか。われわれはナザレのイエスやその他の偉人の教えを偽りとして反証できるだろうか。近い将来に万人が生命の真相を知るようになることを私は心から願うものである。というのは、人間は自己のエゴ的プライドを生命の創造主の意志にゆずり渡すチャンスを無数に持っているからである。われわれはコズミックマン（宇宙的な人間）になろうではないか。永遠を通じて慈悲と理解とをもって奉仕する人間になろうではないか！

生きる方法とは「神の国は遠くにあるのではなく、なんじ自身の中に今ある」というキリストの教えの真意を知ることである。

以上で本書を終えることにする。終りにあたって私の亡き友であり師であったジョージ・アダムスキー氏の言葉をかかげることにしよう。

「他の惑星から隣人が来るのは地球人を楽しませるためではなく、新しい宗教を始めるためでもない。彼らは神ではないからだ。彼らは地球人が喜んで受け入れるならば、自分の知識を喜んでわかち与えてくれるのである。彼らは地球人の生命にたいする見方が誤った前提にもとづいており、われわれの現在の態度と振舞は自滅に至るかもしれないことを知っている。彼らはわれわれの不信を非難しない。いずれこのような空想のジレンマはそれ自体の〝実体〟にたいする認識によって消滅することを彼らは知っているからである。そして地球人は明析に現実的に考えるために自分の心を用いるようになるだろう。神秘主義は自然の法則の

理解と代えられるだろう。

第12章
現在までの経緯

ヨーロッパから帰って以来、私はドイツの上空で撮影した円盤映画を一般へ公開することで多忙をきわめている。今年始めに私は米政府の三つの関係筋にたいして大気圏外から来た宇宙船団を写した貴重な映画フィルムを所持していることと、希望者があれば権威筋に個人的に公開してもよいと申し出た。一九六七年二月に折衝したこの三つの政府機関とは次のとおりである。

1. 米議会上院宇宙委員会　クリントン・アンダーソン上院議員
2. メリーランド州グリーンベルトの米航空宇宙局ゴダード宇宙飛行センター　ポール・ロウマン博士
3. ワシントンの国防省　ジョージ・P・フリーマン米空軍中佐

まもなく、私はこの三名の方から返事を受け取った。最初はまず上院宇宙委員会からで次のとおりである。

「UFOに関する二月十三日付の貴簡を拝受致しました。宇宙委員会はUFOに関する調査報告の取扱権限を有するものではなく、一般にこれは空軍によって扱われています。従って空軍に連絡されるようおすすめします。

クリントン・P・アンダーソン」

二番目の返事はメリーランド州グリーンベルトの航空宇宙局から来た。

「お手紙と、映画フィルムを見せようというお申出を有難うございます。私はそのフィルムに判断を下す権限はありませんが、こちらゴダードの局員たちに見せるのは結構なことと思います。どうぞ私にご連絡下さい。お申出に重ねてお礼を申し上げます。

米航空宇宙局地球化学研究所
ポール・ロウマン」

一九六七年二月二十七日の午前十時三十分に、われわれ一行はNASA（米航空宇宙局）のA1ビルへはいり、その中で二十二名の局員がフィルムを見た。そのあと一時間半の討論会が続き、この科学者連によって非常な興味が示された。飛んでいる物体は何かの反射や雲の流れではないということになり、結局二十三フィートのフィルムに写っているのはUFOだけということになったのである！　この映画について一人の科学者が「あなたはたいした物をお持ちじゃありませんか！」と言った。（この時にはアダムスキー氏が撮影した映画フィルムも同時上映された）ここで発言されたのはすべてこれらの映画を支持する言葉ばかりで、撮影されている物体群は別な天体から来た船団だということを認めたのである。しかしそれにはもっと多くの証拠を必要とするということだった。われわれ一行は尊敬の目で扱われたので、われわれもそのようにお返しした。

一九六七年三月十七日に空軍からの返事がついに到着した。その内容も全く満足すべきものだった。

「UFO映画に関する貴簡がやっと当事務所に到着しました。（空軍UFO調査計画〝プロジェクト・ブルーブック〟事務所）

空軍は貴殿の映画フィルムの検査に非常な関心を持っております。国防省の小官宛にご連絡下されば上映の便宜を取り計います。

フィルム公開のお申出に感謝しますとともに、ご返事をお待ちしております。

米空軍中佐　ジョージ・P・フリーマン」

電話でフリーマン中佐の事務所と連絡したあと、われわれは一九六七年三月二十日の午後二時に国防省へ出頭した。一同はあたたかく迎えられて、数名の高官がフィルムを三度見たあと、フリーマン中佐が述べた。

「こんなすばらしいUFO実写フィルムを見たことはない」このとき私はコロラド大学のUFO調査委員会に知らせて、フィルム中の数コマを送るようにとすすめられた。そうしないと、ここにいる紳士たちは何も証言できなかったからである。しかしここでもわれわれは丁重な態度で扱われた。

以上は私が最近政府機関と接触した事実に関する簡単な報告である。私がリアル・マガジン誌に送った手紙と写真も一九六七年六月号の五頁の社説に載せられた。〝大船団〟の四枚の写真の一つが社説に添えて出されたのである。

最近ある週刊新聞とのインタビューで私はニューヨークへ短期間の旅行をした。例のフィルムが二名のスタッフに見せられたが、二人とも極端な関心を示し、この問題について余裕のある心を見せた。同紙の意図は地球にいるスペースブラザーズの活動をたたえる完ぺきな報告を書くことにあったが、これを独占掲載したのである。

四月十八日にはWWDCラジオに出演するよう招待された。ワシントン市地域の一時間半にわたる〝フレッド・ゲール・ショー〟に出るためである。この番組で多くの問題が討論されて、聴取者たちの好評を博した。多数の電話がかかってきたのである。人々は講演会が開かれる場所やスペースブラザーズに関して多くを知ることのできる場所を知りたがっていた。

五月一日にはワシントン市の〝ヴォイス・オヴ・アメリカ〟のラジオ解説者であるアルバート・ジョンソン氏と会見した。氏の要請により、私はフィルムを公開するばかりではなく氏の国際的なラジオ放送番組でインタビューするのである。フィルムを見たあと氏は非常に感動して、一瞬のためらいもなく電話器を取り上げて国防省のフリーマン中佐に連絡した。中佐はただちに電話に出て、そのとき重要な事実を洩らしたのである。これは幸いにもテープに録音しておいたので次に再録しよう。

「ハロー、フリーマン中佐ですか？　そう、こちらはアルバート・ジョンソンという者で、ヴォイス・オヴ・アメリカの解説者です。最近あなたはフレッド・ステックリングさんの撮影された映画をごらんになったそうですね。空飛ぶ円盤の大船団のように見える映画ですよ。それはほんとうですか。・・・・なるほど・・・・それで私も今スタジオでその映画を見たところなのですが・・・・反射だとおっしゃるのですか？・・・・何の反射ですか？・・・・しかし一体どうして反射だと言えるのですか。物体が樹木や電線のむこう側で動いているのは明らかなのに・・・・これが反射だとすれば何の反射だとお考えですか？・・・・わからない？・・・・じゃあ空軍はあの映画にもう関心はないというわけですか。・・・・あのフィルムを研究室で検査するつもりですか？・・・・ああ、なるほど、コロラドのプロジェクト・ブルーブックに送ってみてくれと・・・・」

この電話のあとジョンソン氏は全く自由な立場で次のように話した。すなわち氏は自分の体験にもとづいて〝職業軍人〟から気のきいた率直な情報を得ることは期待できないというのである。われわれは引き続いておおらかな友好的な雰囲気のなかに予定のインタビューを続けた。次の事実をお伝えすれば読者は興味を持たれるだろう。国防省での会見後まもなく私はコロラドのプロジェクト・ブルーブックに手紙を出して、フィルムの性質とそれを検査してもらいたいという意向を知らせたが、一年以上もたつ現在もなおその返事が来ないのである。フリーマン中佐やその他の高官が映画を見たときには私たちの面前で異常な興奮を示したのに、今度は単なる反射だとあっさりかたづけてしまったのは奇妙なことだ。

約一ヵ月後の一九六七年六月中旬に、ワシントンポスト紙の記者ウィラード・クロプトンがわれわれのグループと会見したいと言ってきた。氏はワシントン・サンデー・ポスト紙にUFOの活動に関する一頁全面の記事を掲載する計画を持っていた。このインタビューは約二時間続いたが、これにはある日曜日の午後に行なわれた会合にクロプトン氏が個人的に出席したことも含まれていた。翌日、私の映画の上映がワシントンポスト紙のビルで記者団を前にして行なわれた。

二週間後の七月二日に「友好的な宇宙人が地球人を救うために来ている」と題して記事が掲載された。この記事にはシャーロット・ブロッブ、トーマス・ヘイマン、私の妻イングリッド、それに私が、全世界から集めたUFOの写真が一杯はいった大きなボール箱を持った約一フット四方の写真が添えてあった。

ポスト紙に出た公平に書かれたこの大きな記事の結果、われわれは一九六七年七月十日にメリーランド州のWFANテレビ局（第十四チャンネル）へ招待されることになった。そして一時間半の放映に出演したのである。この番組も全くすばらしいもので（親切な司会者のおかげによる）、私のフィルムの放映も含まれた。後に聞いたところでは、この番組はバルチモア・テレビジョンにより中継されたとのことだった。

また、WWDCの〝フレッド・ゲール〟ラジオ番組のディレクターがポスト紙の記事に注目して、私は再度一時間半にわたる放送に出ることになった。七月二十五日の夜、私はスタジオへ行って上気嫌のフレッド・ゲール氏に再会し、氏は大気圏外から来る訪問者とその目的についてきわめて好意ある態度を示した。

一九六七年九月の第一週目に新たな重要事が起こった。今度は西ドイツ・テレビジョン・ネットワークとその米国通信員ローベルト・レントゲン氏で、この人がインタビューを求めてきたのである。レントゲン氏はすでに米国で数ヵ月をすごしていて、UFOとその乗員に関する目撃者またはコンタクトなどの入手し得る限りの資料やフィルムを集めていた。レントゲン氏は全く徹底的な質問をし、二人のインタビューは数時間も続いた。

氏の目的はヨーロッパ中に流すためのUFOテレビ特別番組を制作することにあった。後に知ったのだが、映画を含むこの番組は一九六八年二月にドイツ全国で、同年三月にはオーストリアで、五月にはイギリスで放映された。

レントゲン氏は非常に親切な人で、私の映画フィルムの十六ミリ白黒コピーを二本贈ろうと申し出てくれた。これは氏がテレビ番組用にフィルムをコピーさせる必要があったからである。事実、同じ日に私は土地のシネラボへ同行して、オリジナルフィルムの安全を確かめるためにコピー作業全体に立ち会った。また同氏はコロラド州ブールダーで行なわ

れている〝プロジェクト・ブルーブック〟のUFO調査活動で極秘となっているある面白いニュースを伝えてくれた。氏はその調査グループの部員である数名の科学者とインタビューした後にその情報を得たというのである。それによると、コンドン博士（注＝空軍の依頼によるUFO調査団〝コンドン委員会〟のリーダーで、円盤存在の否定説を打ち出して有名になった人）は実際には名目上のリーダーにすぎず、仕事の大部分は十二名の一流科学者の手で行なわれたのだが、その氏名はほとんど公表されていないという。この科学者たちがまもなく気づいたのは、自分たちの公式の権限をもってしても空軍がすでに公表してしまった事柄以上の物事に接近することは不可能だということであった。こうしてこの十二名は空軍が公表している線に沿った〝めくら判押し〟委員会としての役割を果たすように強要されていたのである。

しかしこの科学者連は、最重要物として保管されている資料に接近するためには空軍の極秘保証確認を得る必要があることを知った。そこで十二名の内の二名が最重要資料に接近するためにその確認を得ることにしたのである。そして二人は空軍が絶対に公開しなかった真実の証拠を見てしまったので、事実上口を閉ざしてしまった。最も親しい同僚にさえ話すこともできないのである。こうなると空軍は豊富な証拠を持っているということ、そしてもし空軍がいわゆる火球や幻覚の産物や観測気球などを調査しているにすぎないとすれば、なにも二名の科学者の口を封じる必要はないということの決定的な証拠が存在することになるのである。

一九六七年十月上旬に私は再度メリーランド州のWFANのテレビ・スタジオにいた。これは以前に行なった放映の成功のためだということだった。今度は放映が三時間も続いたのである。オープンマインドを持つ人にたいしては実に三時間もの放映によって重要な情報が与えられることが読者にわかるだろう。

一方、一九六八年は各地の集会や講演で明け暮れした。一九六八年五月なかばにイギリスのテレビ局とのインタビューが行なわれた。このテレビ局で働く二人の紳士が映画撮影機を私の家の中に持ち込んで、約三十分にわたって私と妻にインタビューしたのである。二人の放送記者はこの魅力的な問題（円盤問題）で世界中を歩きまわったと言っていた。

三月二十六日にWWDC局からもう一度〝フレッド・ゲール〟ラジオ番組に出演しないかという招待が来た。そこで私はすごく上機嫌のゲール氏と再会して、その番組で一時間以上をすごした。そして私は金星から来た気高き兄弟たちの一人によってアダムスキー氏に与えられた言葉を鮮明に思い出したのである。

「地球上の至る所に受容的な心を持つ人々がいれば、これは遅すぎることはありません。しかし今は急いでいます！　あなたの使命に無限の父の祝福をこめて、すぐ行きなさい。そしてこの〝希望〟のメッセージを伝えている他の人々（コンタクティーたち）にあなたの声を加えなさい！」

今ふたたび謙虚な感謝をもって私はオープンマインドをもって真実を求めている人々に、そしてそれをもたらす力を与えて下さったわがコズミックブラザーズに心から御礼を申し上げる次第である。（完）

生きるための助言

ジッドゥー・クリシュナムルティー

久保田八郎訳

クリシュナムルティーはインドが生んだ偉大な哲人で，その思想はアダムスキー哲学に肉迫するほどのレベルにあるのではないかとみて編者はニュージーランドの元GAPコーワーカー，F・ディクソン氏の著書紹介によりその一部を七，八年前に本誌に紹介したことがあるが，最近これを重視する声が起こってきたために，あらためて掲載することにした．本邦初訳と思われる本文がアダムスキー哲学への接近と理解のためのかけ橋となれば幸いである．

同一化

なぜあなたは自分を他人、グループ、国などと同一化させるのか。なぜあなたは自分をキリスト教徒、ヒンズー教徒、仏教徒と自称するのか。なぜあなたは無数にあるセクトの一つに属するのか。宗教的にも政治的にも人間は伝統・習慣・衝動・偏見・ものまね・怠惰などによってあれこれのグループと同一化する。しかしこの同一化は創造的な理解を停止せしめ、人間をグループのボス・僧侶・指導者たちの手中の単なる道具と化さしめるのである。

先日もある人が「自分はクリシュナムルティー派で、だれそれは何とかのグループに属している」と言ったが、自分でそう語りながら彼はこの同一化の意味にまったく気づいていないのであった。彼は別段愚かな人ではなく、よく読書し、教養もある。またそのことで感傷的になっているのではなく、感情的でもない。それどころか明析な人である。

なぜ彼は〝クリシュナムルティー派〟になったのだろう。本人は以前にも他人の説を信奉したり多くの退屈なグループや団体に属したことがあったが、ついにこのクリシュナムルティーという特殊な人間と同一化してしまったのである。彼の言葉から察するとその遍歴の旅は終わったようであった。彼は城にたてこもり、それが事の終末となった。みずからクリシュナムルティーを選んだのだけれども、何物も本人の心身を震わせることはできなかった。今はすっかり定着して、今まで私が述べた言葉に熱心に従い、今後述べられる言葉を待っている。

われわれが他人と同一化するとき、それは愛の同一化となるだろうか。

同一化は一つの実験を意味するだろうか？　同一化は愛や実験に終りをもたらすことになるのではないか？　同一化とは実際には所有することであり、所有の主張なのである。そうすると所有は愛を否定するものではないだろうか。所有することは確保することである。所有とは防衛であり、自分を堅固にすることである。同一化のなかには大なり小なり抵抗がある。愛は自己防衛の抵抗の形だろうか。防衛があるところに愛があるだろうか？

愛は傷つけられやすく、しなやかで、受容的である。それは感受性の最高の形である。しかし同一化は無感覚の方へ進む。同一化と愛は一致しない。前者が後者を破壊するからである。同一化は根本的には心が自分を保護して自己拡大を図ろうとする思考作用なのである。そして自分が何かになろうとするときに、心は抵抗したり防衛したりし、所有したり投げ捨てたりする必要がある。この過程においては心またはエゴはより以上に強く有能になってくるが、これは愛ではない。同一化は自由を破壊する。しかし自由のなかにこそ最高の感受性がひそむのである。

実験をするために同一化の必要があるだろうか同一化の行為そのものが探求や発見に終止符を打つのではないだろうか。自己発見の実験が行なわれない限り、真理がもたらしてくれる幸福はあり得ない。同一化は発見に終止符を打つものであり、それは怠惰の別な形である。同一化は代理の体験であり、それゆえに完全に間違ったことなのである。

体験をするためにはあらゆる同一化をやめねばならない。実験をするためには恐怖があってはならない。恐怖は体験をさまたげるからである。同一化——他人・グループ・イデオロギーなどとの同一化——の方向へ進むのは恐怖である。恐怖は他のものに抵抗し、それを抑圧する必要がある。しかし自己防衛の状態でどうして未知の海に乗り出すことができようか。真理や幸福は自分の自我の道の中へ旅をしないでやって来ることはない。人間はイカリでつながれている限り旅はできない。同一化は逃避である。逃避は保護を必要とする。そして保護されるものはまもなく破壊されるのである。同一化はそれ自体に破壊をもたらす。それゆえにさまざまの同一化のなかには絶えまのない闘争があるのである。

われわれが同一化を求めてもがけばもがくほど、理解にたいする抵抗は大きくなる。もし人間があらゆる同一化に気づくならば、そして外界にたいする表現が内なる欲求の投影であることを知るならば、発見と幸福の可能性がある。自分を他人と同一化してしまった人は決して自由を知ることはできない。自由のなかにのみあらゆる真理が存在してくるのである。

ゴシップと不安

ゴシップと不安はなんと奇妙に似ていることだろう。この両方とも不安な心の結果である。不安な心というものは種々に変化する表現や行為を持たねばならない。それは何かで占められねばならない。増大してやまない感情、すぎ去りゆく興味を持たねばならない。そしてゴシップはこれらすべての要素を含んでいる。ゴシップは強烈さと熱心さの正反対そのものである。愉快にまたは邪悪な気分で他人のことを話すのは自分からの逃避である。逃避は不安の原因である。本来、逃避は不安なものである。他人の事にたいする関心は大抵の人が持っているようだが、この関心は、ゴシップ欄や殺人や離婚の記事などを満載した無数の雑誌・

新聞を読むときにあらわれる。

他人が自分のことをどんなふうに考えているかを知りたいのと同様にわれわれも他人のすべてを知りたくなる。このことから粗野な俗物根性と権威崇拝が生じるのである。こうして人間はますます形骸化して中味はからっぽになる。形骸化すればするほど感情と心の混乱が増大する。このために決して静まらない心が生じるが、これは深い探索や発見などができない心である。

ゴシップは不安な心の現われである。しかしただ沈黙するだけでは平静な心を示すことにはならない。平静さは抑圧や否定によって生じるのではない。それは〝存在するもの〟の理解によって生じるのである。〝存在するもの〟を理解するには急速な知覚を必要とする。なぜなら〝存在するもの〟は静止していないからである。

われわれが心配というものをしなかったならば、われわれのほとんどは自分が生きているとは感じないかもしれない。問題と取り組んでもがくことは大抵の人にとって存在のシルシとなる。われわれは問題のない人生を想像することはできない。そして問題と取り組めば取り組むほどますます人間は自分が存在すると考えるのである。しかし想念自体がつくり出した問題にたいして絶えず緊張すれば、心をにぶらせて無感覚になるだけである。

しかし人はなぜいつも何かの問題に心をうばわれているのだろう。心配が問題を解決するだろうか。それとも心が静まれば問題にたいする解答が来るだろうか。だが大抵の人にとっては、平静な心はむしろ恐れた状態である。人々は平静であることを恐れているのだ。なぜなら自分の中に何を発見するかはだれにもわからないからである。そして心配がその妨害物になる。発見することを恐れている心はいつも防衛態勢でなくてはならず、しかも不安がその防衛壁となるのである。

絶えまのない緊張・習慣・環境の影響などによって、心のなかの種々の意識層はいらいらして不安になる。近代生活はこの表層活動と心の乱れを促進するが、これは自己防衛の別な形である。防衛は抵抗であり、それは理解をさまたげる。

ゴシップと同様に、心配も緊張と深刻さの相似形である。だがよく観察すれば、それは他に引きつけられることから起こるのであって、熱心さから起こるのではないことがわかるだろう。〝他に引きつけられる現象〟は常に変化する。だからこそ心配やゴシップの対象も変化するのである。変化とは手加減された継続にすぎない。ゴシップと心配は心の不安が理解されるときにのみ終滅するのである。単なる抑圧や制御だけでは平静さは生じない。それは心をにぶらせて無感覚にするだけである。

好奇心は理解の道ではない。理解は〝自己知（自分を知ること）〟とともにやって来る。苦しむ人は好奇的ではない。空想的な含みをもった単なる好奇心は〝自己知〟のさまたげとなる。好奇心と同様に、空想も不安のシルシである。そしていかに有能な人でも不安な心を持てば、それは理解と幸福を破壊するのである。

想（おも）いと愛

感情的な内容をもつ想いなるものは愛ではない。想いは常に愛を否定する。想いは記憶の上に見出されるが、愛は記憶ではない。愛する他人

のことを思うとき、その想いは愛ではない。人間は友人の性癖・振舞・特徴などを思い出したり、その人と自分との関係のなかに楽しかった、または不愉快な出来事を考えたりするかもしれない。しかしその想いが呼び起こすイメージは愛ではない。想いというものは本来分離したものである。時間と空間、分離と悲痛などの感じは、想いの働きから生じるもので、愛が生じるのはそのような想いが停止したときである。

想いは必然的に所有感を生み出す。意識的にまたは無意識的にシットをつくり出す所有感である。シットがあるところには明らかに愛はない。しかし大抵の人にはシットは愛のシルシとして受けとられている。シットは想いの結果である。それは想いのなかの感情的な内容の反応である。所有感または所有されるという感情がふさがれるときは非常な空白感が生じるので、羨望が愛にとってかわる。あらゆる心の乱れや悲痛が起こるのは、想いが愛の役割を演じるからである。

人が他人のことを考えなかった場合、その人は他人を愛していなかったと言うかもしれない。それなら本人がその人のことを〝考える〟ならば、それは愛だろうか。自分が愛していると思っている人のことを考えなかった場合、本人はむしろ恐れるのではないだろうか。人が、死んだ友人のことを考えなかった場合、その友人にたいして不義理であるとか愛情を持たないと考えるだろう。そしてこのような状態を冷淡とか無関心などとみなすだろう。そこで友人のことを考え始めたり写真を見たり心でイメージを描いたりするだろう。しかしこのようにして自分の心を満たすのは愛にたいする余地を残さないことなのである。人間は友人とともにいるとき、通常その人については考えない。すでにすぎ去ったいろいろな光景や体験などを想いが再現させ始めるのは、その人がいないときだけである。

多くの人間には普通はこの〝過去の復活〟が愛と呼ばれている。そこで大抵の人にとっては愛とは死ということになる。生の否定である。通常、人間は過去や死者とともに生きているのだ。そこで人間はそれを（過去や死者を）愛と呼んでいるけれども、実は人間自身が死んでいるのである。

想いというものの働きは常に愛を否定する。感情的な心の乱れを起こすのは想いであって、愛ではない。想いは愛にたいする最大の妨害物である。想いは〝存在しているもの〟と〝存在するべきもの〟のあいだに分割を生じる。分割には道徳が基本となっているが、道徳も不道徳も愛を知らない。社会の相互関係を保つために心によってつくられたこの道徳構造は愛ではなく、セメントのそれに似た凝固作用なのである。想いは愛に通じない。想いは愛をはぐくまない。なぜなら愛は庭園の樹木のように栽培されるものではないからだ。愛を栽培しようという欲求そのものは想いの働きなのである。

少しでも気づかれれば、想いが人生でいかに重要な役割を果たしているかがわかるだろう。想いは表面上はその位置を保っているが、愛とはまったく関係はない。想いに関連しているものは想いによって理解されるけれども、想いに関連していないものは心によってとらえることはできない。そこであなたは尋ねるだろう。「それでは、愛とは何か？」と。愛とは、想いをともなわない存在の一状態なのである。しかし愛の定義そのものは想いの働きであるので、それは愛ではない。

われわれは想い（想念）そのものを理解しなくてはならない。そして想いによって愛をとらえようとしてはいけない。しかし想いを否定することは愛をもたらさない。想いの深い意味が（想念の深い意義が）十分に理解されるときにのみ、想いからの自由がある。このためには深遠な

〝自己知〟が根本的に重要である。空虚な皮相的な言説が重要なのではない。反復ではなく内省が、定義ではなく知覚が、想いの諸状態を気づかせるのである。知覚することなく、想いの状態を体験することなくして、愛は存在し得ないのである。

（以下次号）

〈編者注〉ジッドゥー・クリシュナムルティーは一八九七年にインド南部のマダナパルで或るバラモンの家族の八番目の子として生まれた人である。一九〇九年に英国人のチャールズ・リードビーターが、川で水浴をしていたこの子を見て話しかけ、自分のバンガローへつれて行った。そしてリ氏はクリシュナムルティーが〝新しい世界的な指導者の素質を持つ人〟であることを発見したという。そこで氏は親しかった神智学関係のアニー・ベサント夫人にこの子供を引き取るように依頼して、夫人は困難とたたかいながら子供の保護者となった。その後リードビーター氏はインドを去り、クリシュナムルティーも英国へ送られて正規な教育を受けて、西欧世界での活動の基礎をきづいた。その後インドではベサント夫人の尽力により〝東方の星教団〟が設立されて、クリシュナムルティーの哲学を広める役割を果たした。

一九二九年までクリシュナムルティーはヨーロッパ各地を旅して偉人と称された。フランスの有名な彫刻家ブールデルは「クリシュナムルティーほどに非個人的な人は存在しない。彼の生活は他人のために捧げられている。生活という砂漠において彼はオアシスである」と賛嘆した。「真理とは道のない土地のようなものである。宗教やその他のセクトという一定の道をたどってこれに近づくことはできない」と言ったクリシュナムルティーは〝東方の星教団〟を解散させて、その後米国のカリフォルニア州に住み、単独で活動を続けた。

本篇の〝同一化〟とは付和雷同という程の意味で、むつかしく考える必要はない。これは宗教・政治活動などのグループ活動にありがちな現象であって、この熱狂的な同一化がこうじてくると一種の集団催眠状態におちいり、自己を失うことになる。よって自由を得るには同一化を避けることが肝要だという警告を述べたものである。これについてはアダムスキーも〝宇宙哲学〟の第十三章〝自由意志か自己催眠か〟で集団催眠の弊害を説いて、個人の主体の確立は自制と意志の力によると述べており、表現こそ異なっても真義においては両者同じである。

〝ゴシップと不安〟においてもク氏は単なる好奇心は自己知のさまたげになると言い、不安な心を排することの重要性を述べている。自己知の方法はア氏が想念観察というはるかに高度な具体的な方法を詳述しているので、それによって自己発見の実験が可能となるが、ク氏の説明はそれに至るまでの序言または要約とみてよいだろう。

〝想いと愛〟には含蓄があるが、つまるところ想念だけでは愛の行為とはならず、愛とは存在の一状態であるという。すなわち具体的な行為に展開することを意味するのである。そのためには自己の想いそれ自体を（想念そのものを）観察して自分をまず知ることが根本的に重要であると述べているが、ここでもア氏の哲学との共通点を見出すことができる。

要するにクリシュナムルティーの哲学は個人の真の自由の確立と生き方について全くユニークな理論を展開したもので、その内容は徹頭徹尾個人の目覚めのための警告に満ちている。

オーラの見える人

久保田八郎

旧知の間柄であるX氏が久方ぶりに上京して拙宅へ来られたのは新春のおトソ気分の抜けきれないある日の昼さがりであった。妻子の出払ったガランとした屋内でお互いの健康を祝福しながら、持参された果実酒でノドをうるおしつつ談論風発、話題は当然のことながら円盤問題へと展開していった。X氏は温厚篤実の士で、熱心な円盤研究家でもあり、特にアダムスキー問題については非常な関心を寄せておられて、その哲学を熱心に信奉され、想念観察も実行しておられる方である。

よもやまのUFO問題を語り合っているうちに、談たまたまオーラの話になった。本誌先号に書いたオーラの見える人のことを私がふと思い出したからである。オーラというのは人体から放射される不可視の光であって、普通の人の肉眼には見えないが、特殊な能力を持つ人には——そんな人はめったにいないけれども——種々の色光となって見えるという神秘的な放射線で、これが実在することは古来から超能力者たちによって確言されているし、科学者でも研究している人があり、仏像類には光背または後光と呼ばれて象徴化されている。しかし実際にオーラが見える人はきわめて少数で、私が直接知っている人でそのような能力を持つ人は先号の記事に出てくるGAP会員の久松氏と橋本健博士夫人くらいのもので、それもときたま見えるという程度らしい。

「実は私にもオーラが見えるのです」と突然X氏が言われる。

「えっ、あなたにもオーラが見える？」私はあっけにとられて聞き返した。「人間のオーラがすべて見えるのですか？」

「そうです。いつ、どこで、だれを見てもオーラが見えます」驚きと好奇心とで茫然となった私は氏の顔を見つめた。オーラが自由自在に見える人は数百万人に一人いるかいないかというほどなのに、X氏がその一人であるとは！　多年にわたるつき合いなのになぜ氏がそれを黙っていたのだろう。

「いやあ、誤解を受けたりトラブルが生じたりしてはいけないと思って今までかくしていましたが、たしかに見えるのです」と氏は照れくさそうに笑いながら話されるが、どうもピンとこない。

「じゃあ、私のからだのオーラが見えますか」

「ええ、見えます」

「どんな色です？」

「そうですね、全体が紫色のオーラで、これは精神的霊的な発達をとげた人特有の色です」

「GAP総会のときには私のオーラを金色に見た人がありますが——」

「それはオーラの見える人によって多少の個人差があるのかもしれませんし、それにあの総会の講演のときにあなたが精神的に非常に高揚した気分になられたせいかもしれません。オーラは常に一定の色ではなく、

精神の状態の高低によって変化します。私にはあなたのオーラが紫色に見えますが、その他に少し青味がかった色に見える部分もあります。青色は大体に天空を意味しますが、どういうわけかアメリカ人に多いオーラの色です。もしかするとあなたは前生がアメリカ人だったのか、それとも今世にアメリカ人またはアメリカという国と深い関係があるからではないでしょうか」

なるほどそういえばアダムスキーはアメリカ人だったし、GAP本部はアメリカにあるし、私の英語の先生はアメリカ人だったし、その方からも非常な影響を受けたし——。

「しかし胸のあたりに少し赤い色が見えます。何か軽い病気があるのではありませんか。赤色のオーラは人間界を意味し、精神的に劣等な人に見られますが、病気の患部もあらわします」

たしかにある。私には病気というほどでもないが慢性気管支炎という持病がある。

「それに腰のあたりにも赤い色が少し見えますから、腰にも不健康な部分がありますね」

まさにピタリ！ 私は郷里にいた頃は一年に一度くらいの割で急にギックリ腰になって数日間身動きできぬ状態になることがあった。東京へ来てからは奇妙にそれが起こらなくなったが、それでもときたま写真の現像のような仕事を長時間中腰になって行なうと腰が痛くなって、しばらく伸びないことがある。こんな事はX氏のご存知ないことなのに——。

さあ面白くなってきた。興に乗った私がやつぎ早に質問をあびせかけるとX氏はいとも明快に回答されるが、それが何ら疑惑の余地はないような即答であり、ことごとく的中するのだ。氏によると最高のオーラの色はさん然と輝く白銀色なのだそうで、こんな人はめったに見かけないという。

「道を歩いているときでも、どんな人にもオーラが見えるのですか」

「見えます。見まいと思っても目を閉じないかぎりイヤでも見えるのです。青・赤・黄・茶色、その他さまざまです。ところがオーラを全然放射していない人がたまにいますが、これはまもなく交通事故か急病で死ぬ運命の人で、こんな人を見るのはつらいですよ。そのことを本人に話すわけにはゆかないし——」

「へえー」と私は目をサラのようにして氏の顔を見た。多年にわたって誠実な態度を示してこられた氏が、今日に限ってとんでもないウソをつきながら私をからかうとは到抵考えられないことである。そこで私は或る人を思い浮かべて聞いてみた。

「××という人がいますが、この人のオーラはどうですか」

「さあ、それは本人に直接会うか、それとも顔写真でも見なければわかりません」

「写真を見ただけでオーラが見えるのですか!?」

「見えます。写真でもその他の物品でも何でもオーラが見えるのです。たとえば今日私が持参しましたこの果実酒も、店頭に並んでいる同種類の品のなかで特に良いオーラを発していたためにこれを選んだのです。私がアダムスキー氏を真実のコンタクティー（スペースブラザーとコンタクトした人）として尊敬するのは、ア氏の写真や氏の撮影になる円盤写真類がすばらしいオーラを放っているのが見えるからです。ア氏以外に真実のコンタクティーということがわかるのは、コニストン円盤のダービシャー少年、セドリック・アリンガム、フレッド・ステックリング、ダニエル・フライ、エリザベス・クララ（南アフリカの婦人で、金星の円盤に乗せられたという人）たちで、その他にもホンモノとわかるコン

タクティーがいますが、ニセモノの円盤写真を見ればそのオーラの色ですぐわかります」

「ウーン！」と私はうなった。何たることだ。こういう鑑定法があったのか！ だが私にはそんな超能力のかけらもない。しかし待てよ、さっきの××氏の写真は保存してある。あれをひとつ出して見せることにしよう。

「この人です。この人のオーラはどうです？」私は持ち出したアルバムの中の一人物をゆびさした。

「ずいぶん純粋な人ですね。このオーラの色はたいへん良いのですが、ちょっと意志の弱いところもあります。現在はアダムスキーを信じていても、他方で人からあんなのはインチキだよと説かれると、考え込んで悩むタイプです」

なあるほど！ そういうふうにも見える人だった。

「じゃあ、この別な人はどうです？」

こうなればアルバム中の人物についてかたっぱしから聞いてみることにしよう。そうすればX氏のオーラによる性格判断の真ぴょう性もはっきりするだろう。

「この人は一見弱そうに見えて実は意志の強い人です。だから敵になるとちょっとおっかないですね。まあそんなこともないでしょうが——」

フン、フン、わかるわかる。

「この人はどうですか」私は数名の人々が写っている写真中の一人物をさした。

「ほほう、この人はまったく幼児のような純粋さを持つ人です。オーラの色はすばらしいですね」

「ではこの人は？」と、また別な写真。

「わあ、すごい白銀色です！ 最高のオーラですよ、これは」X氏は感にたえぬような面持で感嘆の声を発せられる。これらの人はもちろんX氏の面識のない人ばかりである。

「そうでしょうね。私も日頃からすばらしい方だと思って尊敬しているんです」

「おや、ここにずいぶん低級なオーラが見えます。ほら、この人です」と言って氏がさされたのを見ると、多くの人々の中に或る人のおごそかな顔があった。

「全身から出ているオーラが血の腐ったようなドス黒い赤色で、非常に不快な色です。特に腰部の色が悪いのを見ると淋病か何かをわずらったような、とにかく性的不能者のように見えますな、この人は——。気の毒なことです」

意外なことを聞いて私はしばし黙考した。人の性格や病患部などが簡抜けにわかるらしいこの人間レントゲン氏の能力は一体どういうことなのだろう。オーラについてはかなり書物を読んだり話を聞いたりしたつもりだが、こうまで万物のオーラを透視できるすさまじい超能力者について聞いたことはない。これこそまさに数百万人中の一人、いや数千万人中の一人かもしれない。だが、待てよ、まぐれあたりということもある。もう少しためしてみることにしよう。

「この人のオーラはどうですか」私は別なアルバムの或る写真をさし示しながら尋ねてみた。

「やあ、これと同じ色のオーラを放っている本がこの部屋の書棚の中に見えます。あれだ、あれだ」と氏は書棚の最上列の書物群の方をゆびさす。「あの〝哲人とエロス〟という本の右隣りの本です」見上げるとそこはケイ光燈よりも高い位置で薄暗い上に、くだんの本は黒っぽい表

紙に黒の背文字がはいっているので、何という書物なのか二人にはわからない。立ち上がって近寄りながらその背文字を見た私はアッと驚いた。まさに写真中の人物こそ或る意味でこの書物と深い関係のある人なのだ。茫然と立っている私にむかって更に氏は言われる。

「その書物のオーラの色と同じ色の人がアルバムの中にもう一人います。この人です」のぞき込んだ私はまたも感嘆の声を発した。その人もあの黒っぽい書物とたしかに関係がある！

「このグループ写真の中にさっきの血の腐ったような色の人と同じオーラを放つ人が他に二人いるのが見えます。つまり同類ですな」

「——」

いささかボーッとなって返す言葉もなく私はしばし虚空を凝視していたが、ややあって尋ねた。

「一体いつからそんな能力が身についたのですか」

「幼少時のもの心ついた頃からもうオーラが見えていました。先天的なものでしょうね。以前はさほど鮮明に見えなかったのですが、ア氏の〝生命の科学〟を読んで実践してからこの能力が飛躍的に増大しました。しかし一方で悩むこともありました。特にまもなく死ぬ運命にある人に気づくようになってからはどうしたものかと考え込むようになりました。予告すれば殺人犯人とみなされかねないし、言わずにいるのは気の毒だし——。でも今は悩みを克服しています」

「森羅万象ことごとくにオーラが見えるのですか」

「そうです。写真でも何でも——。たとえばここにある電話機からはピンク色の明るい色が出ているのが見えます。近いうち何かよい電話がかかってくるのではないでしょうか。赤色系統でも明るいピンク色は良い色なのです。おや、その机の上においてある手紙の束の中に不吉な色のオーラを出すのがまざっていますね。それです、ああ、それそれ」と私が氏の指示どおりに選り分けた手紙——というよりも振替の払込通知票だったが、その払込人の氏名を見てハッとした。これは女性であるが、かねてから一身上のことで苦悩していた人で、たびたび私宛に相談の手紙をよこされていた人であったからだ。ハハア、やっぱりまだ悩みがあるのだなと思ったが、それにしてもX氏の心眼たるや驚異的である。

「その人はほっておくと自殺するかもしれませんよ。何とか激励しておかれるほうがよいでしょう」

さもありなん、私も以前にそう感じたことがある。

「あそこにある手紙の束の中に、超心理か何かに非常に凝っている人のオーラが見えます」と氏はステレオの右側スピーカーボックスの上に置いてあった別な五、六通の手紙類をゆびさした。氏からそこまでの距離は約三メートルもあるし、だいいち暗い場所だから手紙類の文字など見えるはずはない。立ち上がってその束をバラしていると、その中にはさまっている一枚のハガキがそうだと氏は元の位置にすわったまま指示される。その位置からはハガキの文字は読めないはずだし、私はハガキを水平にして持っていたから、ますます読めるわけはない。よく見ると発信人は或る大学の学生で超心理を研究するグループの責任者なのである！

「そのオーラはいい色です。純粋さをあらわしていますね」とX氏。

氏によるとダイヤモンドは表面は美しく輝いているけれども、そのオーラの色はきたなくて不快だという。結局、多くの人々の物欲から出る低劣な想念が集中するからだろうという結論に達した。私の机上に飾ってある金星人オーソンのカラー肖像画からはすばらしいオーラが放射されているとのこと。絵といえば、机の上方の壁にかけてある大きな絵と

下方においてあるステレオとが同一のオーラを放っており、きわめて純粋な色であるという。その絵というのは今ニューヨークの名門プッシュピン・スタジオにいるGAPメンバーの商業美術家、宮内温夫君が在日中に描いた宇宙人の神秘的な絵画であり、ステレオも同君が愛用していたのを渡航前に私に贈ってくれた優秀な機械なのである！　何もかもア然とすることだらけだが、昨年夏に行なわれたGAP大阪支部大会で私の講演中の写真を見たX氏は、私の頭のてっぺんから上方へ垂直に細い白いスジが一本伸びているのが見えると言われる。私には全然見えない。これはオーラとは別物だということだが、私は首をひねるだけだ。

「会社が求人をして人を雇う場合でも、学歴とか経歴というようなくだらないことで人物を評価するよりはオーラの色できめればいいのでしょうがねえ」とX氏はこともなげに言われる。氏の話では相当に社会的地位のある実力者でも意外に低劣なオーラを放つ人がいるとの由。それはそうだろう。どだいオーラというのは社会的地位や学歴などとは無関係なもので、本人の精神の発達状態を示しているメーターみたいなものらしいからだ。医師は大体にグリーンのオーラを持っているそうだが、これは病人を癒すことと関係があるらしい。したがって病人の患部は赤黒いオーラを示すけれども、医師の手によって快復期にはいるとグリーンのオーラに包まれているのが見えるという。そうすると奇跡的に病人を癒したりする新興宗教の教祖のような人はさだめし見事なオーラを放っているのかしらと思ったら、案外たいしたことはないのだと氏は説明して、結局それは患者自身の強烈な信念によってみずから癒しているのだということであった。X氏自身にも他人の病気を治す力はあるが、その場合は病人の患部がグリーンのオーラでおおわれている光景を心に描いて思念をするのだという。他人の信用度や誠実さを調べるのはいとも簡単で、本人の写真か持物を見さえすればよい。「いつでもお手伝いしますよ」と微笑しながら言われるX氏。

いや、どうも驚いた。すばらしい超能力の持主が私の眼前に今平然と対座され、数時間にわたってマカ不思議な説明と実演を行なわれたのだ。これはやはり数千万人に一人なのかな——。

最後になって氏は含蓄のある言葉を述べられた。「人間のオーラの色は現在の本人の精神の状態または霊的な発達状態を示すにすぎません。したがって絶対的なものではなく、本人の努力によって変化するものなのです。ですからこれは本人のセンスマインドに属する事柄であって、ソウルマインドとは関係ないと思います。したがって私が他人のオーラを透視するのはあくまでも自分が窮地におちいらないための手段としているだけで、色の区別によって他人の等級づけをして喜んでいるわけではありません」

これほどの超能力者であるX氏もいわゆるテレパシーの能力はないのだそうで、他人の心を読み取ることは不可能だという。そうするとオーラの透視とテレパシーとは別物だということになる。私の考えではテレパシーならば一般人にも練習次第では開発の可能性があるが、オーラの透視力ばかりは全く先天的なもののようでどうにもならない。X氏はこの世界で過去十一回生まれかわったことを或る理由によって知っているとのことだが、そうした転生の過程がこの能力と関係があるのかもしれない。

「いや今日はとんだ隠し芸をやらかしました。だれにも言うまいと思っていたのですが、ここへ来たら気分がよくて、ついしゃべる気になってしまいました。しかし私の名前は内緒にして下さい」

特別寄稿

アダムスキーの思い出

アリス・ポマロイ

筆者アリス・ポマロイ女史はかつてアダムスキーのよき協力者であった人で，師亡き後も米国GAP理事長アリス・ウェルズの右腕として活躍している世界GAP有数のコーワーカーの一人である．今回日本GAPの要請により特に亡き師の思い出をつづった一文を寄せられた．これはアダムスキーに親しく接した人の重要な証言であり貴重な記録である．

ご依頼の原稿をお送りします。あなたの目的にかなえばよいがと思っています。日本人は精神的に深味のある感受性の強い国民であることを知っておりますので、その線に沿ったものを心中に思い出そうと努力しました。一個人の書いた記事でアダムスキーを正しく評価することは無理でしょうが、これは氏の人格の一断面ですからそのつもりでお読み下さい。この記事は人々に奉仕する上で深い意義をもつものであり、また生命それ自体の象徴化でもありますので、最も私の心にかなったものです。

この記事をご依頼下さったことにたいして、あなたとその読者の方々に深く感謝いたします！　これを書くことは私にとって特別な喜びでした。私は初めてアダムスキー氏の講演会に出席したときの録音テープを取り出して少しずつくり返し聞きながら思い出を新たにしました。そして氏が私に与えてくれた〝生命〟の深いフィーリングを再度よみがえらせたのでした。とかく人間は生きることに熱中しがちで、ふり返って過去を思い出すことを忘れるものです。したがって今これを書いていると氏に関する事や氏が話された事などがふたたびあざやかに浮かび上がってきます。これは私が時折必要とする〝生気づけ〟ですから、こうしてあなたを援助することをうれしく思います。

私はアダムスキー氏にたいしてその晩年の最後の一年間だけ、しかも亡くなられる頃まで親しく接したにすぎません。最初にお会いしたのは一九六四年の復活祭の週間のことで、三百五十マイルを旅して二日間氏といっしょにすごしました。氏がこのニューイングランドを離れたのは、それからちょうど一年後のグッドフライデー（受苦日）の朝のことで、氏はそのままワシントン市へ向かいましたが、一週間後の金曜日の夕方に亡くなられました。

氏と初めてお会いしたあと、氏は私という人間の正体を見抜かれて、過去世からの私を認識されました——後になって氏は、過去の世において二人はいっしょに働いたことがあるのだと申されました——ので、それ以来二人は文通していましたが、その年の十月に初めてニューイングランドへ来られて、私の家族とともに八日間をすごされました。翌年の春になって氏はふたたび当地へ来られ、約三週間をすごされて、この間私たちはインタビューや会合などで多忙をきわめましたが、密接に働くことができました。あたかも生来知り合っていた親友のような感じでしたが、これはすばらしい体験でした。それ以来私は多くのアダムスキー協力者の方にたいしてもこれと同じ感じを持ち続けています。自分の体験からみて私は人間がたしかにみな兄弟であると感じています。いつか日本のみなさんとお会いできれば——それを望んでいますが——やはり同じ感じがするでしょう。

私たちの仕事には大きな未来が待ち受けています。この活動に専念して人間の宇宙的な生き方の達成という仕事を成就することができれば、ふたたびアダムスキー氏に会えるものと思います。別な惑星のブラザーズにも会えるでしょう。これは価値のある願いであり夢でもありますから、実現するように努力するつもりです。たとい会えなくても私たちの仕事の達成はきわめて重要です。

アダムスキー氏の話によれば、テレパシーの実行に際しては受信者の姿をよく知っていてそれを心中に描かないと、送信が困難だということですから、ここに私の写真を添えておきます。みなさん方から私宛に寄せられる写真も非常に役立ちます。

* * *

それは数百名を収容できる大きな講堂で、満員に近い盛況でした。ときどき口をついて出るアダムスキー氏のユーモアによって爆笑がうずまく中を、聴衆は氏の講演——他の惑星から来る人々やその宇宙船、地球へ来る目的などの話を熱心に聞き入っていました。

氏は最初にUFOの分野にはいった頃のことも、砂漠における会見、一九五九年までに十八ヵ国で講演を行なうようになったいきさつなどについて話しています。その説明によると、地球人にとって不可能なUFOの飛行ぶりは地球人の知性にたいするチャレンジであり、それによって地球人は宇宙開発計画を始めたといいます。「これが（円盤出現が）どんなに福音であったか、おわかりですか」と氏は熱心に語ります。「人間が円盤についてどのように考えようが、円盤は地球人にたいして大きな奉仕をやったのです！ 円盤は地球人に未知の領域を探険させることになりましたが、今後も宇宙開発の方向にむかって絶えず仕事と機会を与えることでしょう。戦争という絶えまのない脅威にもかかわらず、われわれは知識と学習とによって生きることになるでしょう。地球の文明にとって唯一の希望である人類の黄金時代を迎えることになるでしょう！」

あまりにも早く講演は終了しました。集会がすんでから氏は身をひるがえして壇を離れます。背後には休息用の控え室へ通じるドアーがあるのですが、氏はその方へ行かないで、ホールの床へおろされた小さな階段を降りて行くと、多数の聴衆が席を立ってこの新来の友の所へ殺到して取り巻きました。

以上がアダムスキー氏を初めて見たときの光景です。その後氏を知るようになり、共に働くようになってから、これは典型的な光景であることがわかりました。氏は決して安易な逃げ道を選ばず、常に自身の内部

から確実にわき起こってくる〝生命の真実〟によって支えられた音楽に耳をかたむけます。進歩するにつれて宇宙的な生き方はいわゆる困難な道となります。アダムスキー氏はそれを教えたばかりではなく、精一杯にそのような生き方をした人であることがわかりました。

氏は同胞を愛し、あくことなく人々とともにすごし、人々と語り合い、多くの質問に答え、自分の生活と仕事に関する最も深い関心事を人々にわかち与えました。

その努力のためにしばしば過労におちいりましたが、それでも奉仕の願いをもってこの生き方を遂行しました。

その夜講演が終わってから氏が前方のステージからホールの後方にある休憩所まで通路を歩いて行くのに四十分かかりました。群集に取り巻かれながらも氏は品位を保って移動し、質問が出るたびに立ち止まって解答を与えるので、いっときに数歩しか歩けません。こんなふうにしているとますます多くの質問が出るばかりですが、これはちょうど生命そのものが自然の諸法則のなかを永遠につながれた出来事の連鎖として移動してゆくのに似ています。

だれしも一篇の記事ですべてを語ることはできませんし、同一の体験をしても万人の見方はそれぞれ異なります。その夜の講演やその後の交わりにおいて明らかになったのは、アダムスキー氏が人々にたいして果てしない忍耐力と謙虚さを持っているということです。氏が普通の人であろうと、この世における偉大な人であろうと、万人は等しく氏の兄弟なのであり、氏はそのように人々に接してきたのです。

氏の目は魅惑的で、常に人々と調和して変化し、自身の実体の多くの面を反映していました。他人を見るときは〝記憶の書（アカシック・レコードといわれるもの）〟すなわち相手の魂に刻まれた〝生命の言葉〟を読み取ることができたのです。その目が深味をたたえた、何かを探索するような黒い知恵の泉であるときには、私は氏の凝視から目をそらすことはできませんでした。しかも氏は宇宙船に乗ったブラザーズについて述べるときと同様に、自分の見た物を非難することなく、ただそれを理解するだけでした。

ときとしてその同じ目が燃えることがありますが、これは氏の決意と深い確信の力がわき起こったときにそうなるので、これによって反対者たちや非難・嘲笑にたいして断固たる前進を続けることができました。宇宙の法則から成る原理に支えられている氏は、その理解力によっていかなる討論においても多くの分野にわたる驚くべき知識でもって自身を抑制することができたのですが、しかもこの世界の権威者にたいして自分の不適当な発言があれば、ただちにていねいな態度でそれを認めました。氏の揚げ足をとろうとする人にたいしては——ときたまそんな人がいたのですが——自分の主張を深く立証する回答をいつも用意していました。

また、氏の強い顔には親切さとおだやかさがたたえられており、理解力と深い憐れみを示していました。あるとき一人の親しい仲間が氏にむかって極端に侮蔑的な横柄な態度を示したことについて私が質問したら、「私は彼を傷つけたくない」と氏が言ったことがあります。しかしその人にたいしては真理そのものが報いました。氏は必要とあれば人間の理解を助けるために遠慮なく宇宙の法則の性質を述べるからです。

しばしばエゴは〝知る者（創造主）〟に敬意を表して服従する必要があります。宇宙の法則においては、過失をおかすことは当事者に責任を伴うとともに進歩の特権でもあります。そして自己の過失を認めることは恥辱よりも名誉です。この重要さを認めて理解するのはときとして地

球人にとっては困難ですが、アダムスキー氏はこれにたいして忠実でした。

氏は各個人についていつも深い関心を示し、容易に目標に達しないにしても努力する人を祝福しました。しかも氏がどんなに人々を愛してそれを助けようとしたにしても、自身の内部の〝真理〟を認めようとしない人にはほとんど望みがないことも知っていました。結局、人間は永遠の生命の道をただ一人で歩むのです。この賢明な〝真理〟以上に物事をよく知っている人間は存在しません。

氏は素朴な人なので素朴な物事を楽しんでいました。花を愛して友達のように語りかけたり、絵画や写真を愛好したり、人々や場所や出来事などの思い出を楽しんだりし、自分の仕事を援助してくれる人のすべてに心から感謝して、簡潔な言葉で次のような礼を述べていました。「あなたのご親切を決して忘れません」氏は完全な人ではなく、他人と同じような人間らしい欠点もありましたが、回顧すればそれらは問題とならないようです。ときどき氏の目はするどいユーモアのセンスで輝くことがありました。あるときテレビ出演に関する電話の交渉がすんだあと、思いがけない喜びに胸をはずませる少年のように「さあ、みんなをまいらせてやるぞ！」と冗談をとばしていました。

「人生は気楽な態度で生きるべきだ」というのが氏の口ぐせの忠告でした。氏とともに働いた人たちはこの生き方をまのあたりに見ています。あるとき講演会中に工合のわるい事が起こり、上映されている映画がたびたび停止したり急に動いたりしたために、故障をなおそうとして努力しているうちにフィルムが急速にこまかく巻き込んだことがありました。観衆はいらいらしてあざけりながら騒ぎ始め、これは故意のたくらみだと言う人もありますし、不快な顔をして出て行く人もあります。結局映画は効果的ではなかったにしても全部上映されました。フィルムがもとどおりになるまでのあいだずっとアダムスキー氏は冷静さを保ち、観衆からの質問に応じることによって待ち時間をうめ合わせました。私たちが最後に劇場を出たとき、驚いたことに氏はいつもの態度のままで陽気にはしゃいでいて、次の事態にそなえていました。

1964年10月・マサチューセッツにて・アダムスキーとアリス

聴衆の面前で自分をよく抑制できる氏は、多くの講演を通じて非常な努力を払った上でこの抑制力を身につけたものと思われます。というのは氏ももとは人並にしゅう恥心があり、個人的に自分にあてられるスポットライトをきらったからです。「自分は一体何をやってきたというのか」と氏はよく言っていました。「この豊かな祝福を受けるに足るほどの事を——。私はこんな名誉を（ブラザーズからコンタクトされた名誉を）受けるほどの価値はないのだ」氏のような人を知って共に働く特権を与えられたことにたいして「自分は一体何をやってきたというのか」

と私の心がこだまします。

私にとって最も忘れがたい思い出は、二人ですごしたある静かな夕方の短い対話です。文字どおり氏の足元の床の上にすわった私にむかって氏は質問しました。氏自身の内部で知覚していた一つの心象をゆっくりと少しずつ引き出してゆくのです。師と弟子として二人はあれこれと語り合い、氏が好んで用いた一つのパタンを追求してゆきました。「私はあなたに何も教えることはできない。ただあなたの内部にすでに存在している〃何か〃を気づかせるだけだ」と氏は申されます。問題点の各部を調べたあとで、全体が浮かび上がってくるのでした。二人の意見が一致したのは次のとおりです。

「十分に生きねばならないわれわれの人生は愛と奉仕の生活でなければならない。こうして互いに相手を高揚させ合うのである。人は自分の必要物を常に知るけれども、それは〃宇宙の意識〃に喜んで仕えることによってのみ満たされるのである。

創造主はその子たちにたいして何も否定はされないが、子たちが喜んで否定されることを望んでおられる。時間・エネルギー・労力・愛など、他人のための犠牲は常に期待以上の報いをもたらす。他人がそれにこたえるか感謝するかは問題ではない。うわべの結果も問題ではない。創造主は知っているのだ！

自分の幸福のために愛や喜びや平安を求めようとすることは、利己的になることである。他人のためにこれらのものを与えようとするときにそれが自分に返ってくる。そしてエゴを宇宙的な愛に変えるのである！」

こうして氏はあざやかに私を真自我へつれもどしたのでした。心の中で単なる信念にすぎなかったものが、心について十分に知る方向へ向かわせられたのです。生命のエッセンスそのものへ！ その夕方私たちは〃一体化〃していたのであり、今もなお〃一体化〃しており、人類のすべてが〃一体化〃しているのです。他人の方へ出かけて行くときは、すなわち自分の〃家族〃の方へ帰って行くことです。アダムスキー氏は他人の方へ出かけるために生涯をついやしました。そして万人のための愛・光・宇宙的な生命というギフトをもって〃家〃に帰っています。

深い誠意、謙虚な素朴さ、高貴な品位、はかりしれない価値をもつ熱意、果てしない忍耐力と誠実さ。これらは地球人が偉人と呼んだ人々によって残された痕跡です。この人たちは気高い目標と高度な理想をかかげた知恵とビジョンを持つ人々であり、同胞にたいして憐れみと関心を持つ人々であり、ヒューマニティーにたいして偉大な物事を達成した献身的な人々でもありました。ジョージ・アダムスキー氏はこのような人たちの一人です。氏の思い出はそのまま希望であり、未来への約束でもあります。（久保田訳）

（33ページより続く）

ートル、全長六百メートル近くあるのだと友が語ったとき、私は驚かなかった。

成層圏に静止したまま滞空しているこの巨大な葉巻型母船の壮大な光景は私の記憶から決して消えることはないだろう。

（第2章終り。以下次号）

或るアドバイス

IGAP＝J

海外の或る方面から次のようなアドバイスが寄せられた。アダムスキー哲学を実践しようとする人には有益な意義を帯びていると思われる。

＊人間とは

「全人類は宇宙の英知の自己実現・自己限定であると言えます。しかし人間は〝英知〟の自己実現よりもむしろ個人的なエゴの自己実現と化しています。肉体の各感覚器官はエゴの表現のためにあるのではなくて、まさに〝英知〟の自己実現としなければならないのです」

＊コンタクトするには

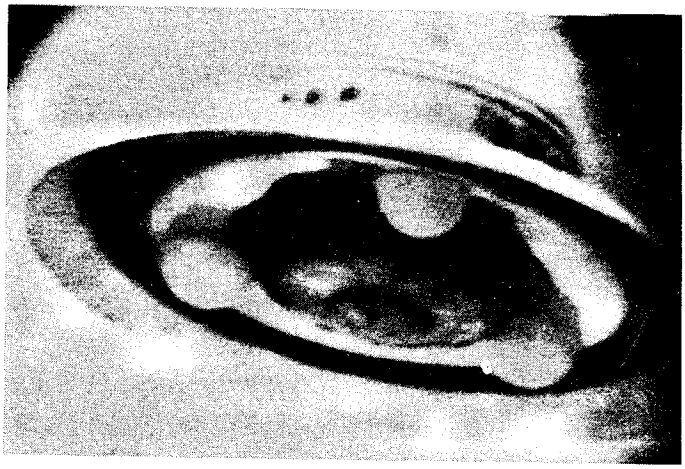
「スペースブラザーズとコンタクトを望む人々は、その目的達成を目指して気軽な気分でコンタクト旅行を（日帰り程度）するとよいでしょう。幾度となく目的をかみしめてやってごらんなさい。目的こそ大切です。願望（目的）はパズルであり、一つ一つの体験が全体を構成します。それは一つ一つのハメ絵の各部分がやがて全体の絵（目的）になるのと同様です。何度も試みて結果が思わしくなくても、あきらめてはいけません。理由づけや希望的観測で失敗をおぎなってはなりません。忍耐強くやるのです。目的を一度定めたらそれを変えないことです。成功は目的を変えないところにあるのですから——。やがてあなたは未知の友（進化した惑星の友）と対面している現実に出くわすでしょう。

コンタクト旅行で、どこへ行けばよいかは自分の内部の印象に従って下さい。そのためには内部から来る印象に誠実に（素直に）なる訓練をする必要があります。宇宙的な性質を帯びた印象は非個人的であって、いかなる個人的・エゴ的なメッセージをも含みません。しかし熱心な人なのにどうしてもコンタクトできないこともありますが、その理由は本人に名誉欲があって、洩らしてはならないことを隠しきれないからです。アダムスキー氏の場合は名誉欲がありませんでした。また熱心のあまり私生活や家族間にトラブルが発生しそうな場合もコンタクトは不可能でしょう。これはブラザーズの本人にたいする思いやりなのです」

＊奇跡を発生させるには

「アダムスキー氏の〝生命の科学〟にはすばらしい内容が含まれており、現在、人間の宇宙的意識を開発するためのテキストとしてこれ以上の書物は世界中に見当らないでしょう。これを読んでセンスマインドの抑制に成功すればすごい奇跡が発生するはずです。その場合は〝生命の科学〟を頭脳で読むのではなく、内部のフィーリング（感覚）で読むのです。奇跡を起こすにはまず強烈な信念を持ち、最初に心中で望ましい〝結果〟を鮮明に描いて、次に「これは個人としての自分が行なうのではなくて〝宇宙の意識（英知）〟が行なうのである」と思念することが必要です。このようにして〝生命の科学〟を病人に読んであげるだけでも病気は癒やされるでしょう。盲目の人の目が開くかもしれません」

空飛ぶ円盤同乗記 改訳 2



ジョージ・アダムスキー　久保田八郎訳

ハンドルをにぎっていた人は行先をよく心得ているらしく、巧みに運転していた。私はロサンジェルスの郊外へ続く新しいハイウェーをくわしく知らないので、どの方向へ行こうとしているのか見当がつかなかった。一同は無言のまま乗っていたが、二人が身分を明らかにして会見の理由を説明してくれるのを待つだけで私はすっかり満足していた。

普通ならばこんなまかせきった態度は不法行為のはびこっているこの世界では無謀に近いことがわかっているが、これは他の文明の人々が自分よりも偉大な知恵を持つ人の面前に出たときに示す態度なのである。これは尊敬・謙譲・忍待・信念などを示そうとしてアメリカインディアンが常に示している習慣でもある。私はこのことをよくわきまえていたので、そのように振舞った。というのはこの人たちの面前にいると、大いなる知恵と憐れみの心を持つ人といっしょにいるために、私を子供のように感じさせるある力を感じたからである。

市の郊外地を離れるにつれて燈火や建物がうすれてゆく。背の高いほうの男が初めて口をきった。「あなたはずいぶん忍耐強くやってきましたね。私たちの正体や行先をしきりに考えておられることはわかっています」

考え続けていたことはもちろん自分で認めたが、詳細を語ってもらえるまでは待つだけですっかり満足しているのだとつけ加えた。

相手は微笑して運転している人をゆびさした。「この人はあなたがたが火星と呼んでいる惑星から来た人で、私は土星といわれている惑星から来た者です」

その声は柔らかく心地よくて、英語は完ぺきであった。若いほうの男も柔らかく話すことを私は知っていたが、その声は少し甲高い調子だった。二人がどんな方法で、またどこで英語をこうまで巧みに話すことを

学んだのだろうかと私は不思議でならなかった。

この想念が心中をかすめたとき、即座に気づかれてしまった。ホテルを出て以来初めて火星人が口を開いた。「私たちは地球人が〝コンタクトマン〟と呼ぶかもしれないような者です。私たちはこの地球で生活して働いています。そのわけは、ご存知のように、地球では衣類・食物その他人間が持たねばならない多くの品物を買うために金をもうける必要があるからです。私たちはすでにこの数年間地球に住んでいます。最初は少し言葉になまりがありましたが今はなくなりました。それでおわかりのように地球人でないということに気づかれていません。

仕事やレジャータイムのときは地球人にまじっていますが、別な世界の人間だという秘密は絶対に洩らしません。十分におわかりのように、洩らせば危険になるのです。私たちは、ほとんどの地球人が自分を知るより以上に地球人のことをよく理解していますし、地球人をとりまいている多くの不幸な状態の理由もはっきりとわかります。

あなたが他の惑星に人間が存在することを主張し続けておられる一方、科学者たちが他の惑星の生命維持は不可能だと言っているために、あなたが嘲笑と非難に直面しておられることは私たちにわかっています。ですから私たちが自分の故郷は別な惑星だとほのめかしただけでも、この身にどんな事が起こるかは容易に想像できるでしょう。その簡単な事実——ちょうどあなたがたが生活して学ぶために他国へ行くように、私たちが働いて何かを知るために地球へ来たという事実を口外しようものなら、気違い扱いされるでしょう。

私たちは故郷の惑星へ短期間帰ることが許されています。ちょうどあなたがたが環境の変化を望んだり旧友に会いたくなったりするのと同様に、私たちもそうするのです。もちろん地球の知人から怪しまれないように公休日とか週末にそうした留守をする必要があります」

彼らが地球で結婚して家族をかかえているかどうかは尋ねなかった。そんな質問をする場合ではないという印象を受けたからである。相手が与えてくれた情報を熟考しながら、数分間ふたたび沈黙が続いた。なぜ私が選ばれて彼らの友情を受け、別な世界から来た人たちによってこの知識が与えられたのかと考えてみた。理由は何であれ、私は非常に謙虚な気持になり、心から感謝した。

これらすべての事を考えていると、土星人が静かに言った。「私たちが語り合った地球人として、あなたがその最初でもなければ唯一の人でもありません。私たちがコンタクトした人は地球の各地に沢山います。そのなかには自分の体験をあえて話したばかりに迫害された人々もいますし、いわゆる〝死〟に至った人も少数います。その結果、多くの人は沈黙を保っています。しかしあなたが現在書いておられる書物（空飛ぶ円盤実見記）が出版されると、金星と呼ばれる惑星から来た私たちの兄弟と砂漠で行なわれたあなたの最初のコンタクトの物語によって、多くの国の人が激励されて各自の体験をあなたに報告するようになるでしょう」

私はこの新しい友に強い信頼を寄せたばかりでなく、未知な者同士ではないという圧倒的な感情がわき起こってきた。また次のような深い確信を持ったのである。彼らは地球に関してあらゆる質問に答えることができるし、あらゆる問題を解決できる。必要を感じたり使命を遂行する際には地球人にとって不可能な離れ業をやってのけることもできるのだ。

一同は長いあいだ——たぶん一時間半ばかり——なめらかなハイウェーを飛ばしたが、どうやら砂漠地帯へはいったという感じ以外は、依然としてどの方向へ行くのかわからない。暗くて外景のこまかい点も見え

ない。私は彼らが言ったことを吟味するのに夢中になり続けたが、前にも述べたように会話はほとんど交されなかった。

突然ショックを感じて私の冥想は破られた。車がなめらかなハイウェーからターンして石だらけのせまいでこぼこ道へはいったからである。火星人が言った。「いまに驚きますよ！」

この道路を他の車と出くわすことなしに約十五分間進行した。すると高まりくる興奮とともに遠方の地上に一個のほの白く光る物体が見えた。車はその物体から約五十フィート手前で停止する。物体の高さは十五フィート（四、五メートル）ないし二十フィート（六メートル）と見積もったが、それは約三ヵ月前に（砂漠で）最初の会見が行なわれたときの円盤すなわちスカウトシップに酷似していることがわかった。

車がとまったとき、光る宇宙機のそばの地上に一人の男が立っているのが目についた。一同が車から降りてから仲間が呼びかけた。円盤のそばの人は機体の装備品を取り扱っていたらしい。三人がその方へ歩み寄ったとき、歓喜に打ち震えて私はその人が最初のコンタクトのときの友であることに気づいた——あの金星人なのだ！

彼は最初の場合と同じスキータイプの宇宙服を着ているが、この服は色が明るい茶色で、腰バンドの上辺と下辺にはオレンジ色のスジがついている。

彼の輝かしい微笑はこの再会にたいする私の幸福感をともに喜び合っていることをはっきりと示している。挨拶が交されてから彼が言った。「降下する途中でこの小型機の小さな部品が破損したものですから、あなたが到着されるのを待つあいだに新品を作っていたのです」

砂上におかれた小さなるつぼの中味を相手が取り出すのを私は珍しそうに見つめた。「タイミングは完ぺきでした。あなたが来られたときにちょうど装置が完成したのです」と彼が言う。

ふと驚いた。最初のコンタクトのときには英語が全然話せない様子だったのに、かすかなまりのある英語を話すのだ。このことを説明してほしかったが、相手が何も言わないので私は質問を遠慮した。

そのかわり、彼が投げ出していた非常に小さな鋳造金属のかたまりみたいな物に身をかがめてそっと触れてみた。まだひどく熱いけれども手に取れないほどではないので、私はそれを注意深くハンカチに包んで、コートの内ポケットにきちんと入れた。この金属のかたまりは現在も所有している。

つれの人たちは私のこっけいな仕草を笑ったが、その陽気な声に嘲笑の響きは少しも感じられなかった。私の答はすでにわかっていたのだろうが、「なぜそんな物をほしがるのですか」と金星人が尋ねた。

私はその物があなたがたの地球来訪の事実の証拠になるかもしれないと説明し、私があなたと最初のコンタクトをしたことを一般人に語るときに〝まったくのでっちあげ〟でないことを証明するためのいわゆる〝具体的証拠〟を一般人は要求しているのだと話した。

なおも微笑して相手は答えた。「そうですか。地球人はまるで土産物蒐集人種ですね！　しかしこの合金は地球に見られるのと同じ金属類を含んでいることがいまにわかりますよ。金属というものはどこの惑星でも同じなのですから——」

ここで読者にことわっておくのがよかろうと思うが、私が会った宇宙人たちで、地球人のような名前を告げてくれた人は一人もいないのである。この理由は彼らが説明したけれども、ここでは十分に述べられない。これには別に神秘的なものがあるわけではなく、われわれが用いているような人名の概念が完全に違うのだとだけ言えばよいだろう。

この新しい友人たちとの実際のコンタクトにおいて名前のない状態でも不便を生じないが、読者にとってはきっと工合がわるかろうし、コンタクトのふえる本書の後半においては特にそうだろうと思う。そこで地球のわれわれは互いに名前に頼っているのであるから、一応名前をつけておくことにしよう。

ここではっきりさせたいのは、この新しい友人たちを紹介するのに使用する名前は絶対に彼らの本名ではないということだが、こうした名前を選んだのは私なりの理由があることと、以下本書中に出てくる本人たちに関してその名前に意義が含めてあるということをつけ加えておきたい。

火星人をファーコン、土星人をラミュー、金星人をオーソンと呼ぶことにする。

第2章 金星の円盤の内部

われわれの到着後まもなくオーソンが身をひるがえして円盤に乗り込み、私にも乗れと手まねきした。ファーコンとラミューがそれに従う。すでに述べたように円盤は地上にどっしりと静止していて、乗るには一足登りさえすればよかった。

待機している円盤に初めて接近したとき、私はこういうことになるのではないかと期待していたかもしれないが、今実際に乗ったからには私の喜びも十分におわかりだろう。まず内部をすばやく観察して、彼らの目的は円盤の内部をただ見せるだけなのか、それとも——まず望み得ないことだが——実際に私を宇宙旅行につれて行こうとしているのだろうかと考えてみた。

背の高い土星人のラミューが身をかがめずに出入りできるほどの高いドアーから、一同は一室だけのキャビン・コンパートメントへ直接にはいって行く。最後にラミューがキャビンの床に足を踏み入れると、ドアーは音もなく閉じられた。きわめてかすかなブーンという音が聞こえるのに気づいたが、これは床下と、円盤の壁の上部に装置してあると思われる大コイルの両方から等しく発するらしい。そのブーンが始まった瞬間、このコイルが強烈な赤色に輝き始めたけれども、熱は出さなかった。（砂漠の）最初のコンタクトのときの円盤にもちょうどこのような輝くコイルがあったのを思い出した。しかしあのときはそれが日光を受けてきらめくプリズムのように各種の色光——赤・青・緑——を放っていた。

どこから見てゆけばよいか見当がつかない。あらためて驚嘆したのは継ぎ目がわからないように機体の各部を組み立てることの可能な、信じられないほどの技術である。最初のコンタクトのときの円盤には入口のドアーらしいものが全然見えなかったけれども、今われわれのうしろでしまったドアーは跡形もなく、固い壁のように見えるものがあるだけだ。

ドアーの密閉、ミツバチの群れを思わせるような柔らかいブーンという音、上部コイルの輝き、船内のライトの増加など、あらゆるものが同時に発生するように思われた。

何もかもがすばらしいので、どれか一つの物に心を集中させるには極力自制する必要があった。観察した物の明瞭な説明を（他人に）するために、あらゆる物の明確な影像を頭にきざみつけて円盤を出ようと思っ

た。

私はキャビンの内径を約十八フィート（約五メートル四十センチ）とみた。径約二フィート（約六十センチ）の柱が一本、ドームのてっぺんから床の中心を下方へ伸びている。後に聞いたところによれば、これは円盤の磁気柱で、これによって〝自然力〟を利用しながら推進するとのことだが、作動する方法については説明しなかった。

ファーコンがゆびさしながら言う。「この円柱の頂上は普通はプラスになっており、ごらんのように床を突き抜けている下部はマイナスになっているのです。しかし必要なときにはボタンを押すだけで両極を逆にすることができます」

床の中央の六フィート（一メートル八十センチ）ばかりは澄んだ丸いレンズで占められていて、磁気柱がその中心に位置しているのに気づいた。この大レンズをはさんでその縁に近く、二脚の、小型ながらもすわり心地のよさそうなベンチがあるが、それらは円盤壁に合わせて曲がっていた。ベンチの一つにすわるようにすすめられたので腰をおろすと、内部の状況を説明するためにファーコンが並んですわった。ラミューは反対側のベンチに席を占め、オーソンは操縦パネルの所へ行く。このパネル（複数）は二脚のベンチのあいだの壁ぎわに位置しており、われわれがはいって来たけれども今は見えなくなったドアーの真向かいにあたるのである。

全員が席につくと、小さな柔らかい横棒がわれわれの腰のあたりまでさがって来た。この横棒は一種の柔軟なゴム性の物質で作られているのか、それとも単にそのようなもので覆われているのか、どちらかだろうが、この装置の目的は明らかである。人間が前方へかたむいたり身体のバランスを失ったりするのを防ぐ簡単な安全装置なのだ。

ファーコンが説明する。「どうにかすると、完全に接地している円盤が離陸するときにするどいジャーク（注＝急にぐいと引っ張り上げられる感じがすること。飛行機やエレベーターなどで感じられる）を感じることがあります。これはめったにないことですが、一応準備しておくのです」彼は微笑してつけ足した。「地球の飛行機の安全ベルトとまったく同じ理屈ですよ」

何か驚嘆すべき事が実際に起ころうとしているのをどうもまだ信じきれない気持であった。金星人との最初の会見以来、彼が去ったあと茫然自失の態でとり残されてからというものは、いつかこのような（同乗の）特権が与えられるものと思って夢見ていたが、今はたしかに宇宙旅行の準備をしているらしいので、もう歓喜の気持をおさえきれなくなっていた。不十分ながらもこの体験を他人に伝えるために、これから観察して学ぶ事柄をもれなく脳裏に焼きつけなければいけないぞと、私は何度も自分自身に言いきかせた。

ファーコンが続ける。「この宇宙機は二人ないし多くても三人乗りとして建造されたものです。緊急時にはもっと多くの人を安全につめ込むことができますが、そんな必要はほとんどありません」

それ以上は説明しないので、彼の言う〝緊急時〟とは他の円盤に故障が発生した場合の救援を意味するのかなと考えてみた。彼らの科学知識の驚異的成果をまのあたりに見て非常な感銘を受けた私は、何かの失敗があるとはちょっと考えられなかったものの、結局彼らも〝人間〟であるからには、どんなに地球人以上に進歩していようとも、やはり過失や変化が起こるのだろうと考えないわけにはゆかなかった。

目を転じてグラフやチャートを見た。それらは私の目に見えないドア

ーの両側の壁を約三フィート（約九十センチ）の幅で覆っており、床から天井までとどいている。魅惑的だが、地球でこのような物を見たことはなく、使用目的をあれこれ推測してみた。針やダイヤルはないが、変化する種々の色のフラッシュがきらめいて、明度にも変化がある。特殊なチャートの表面を横切って動く色光の線のようなのもあり、上下に動くのもあるし、十字形のもあるかと思えば、別な幾何図形の模様を描くのもある。これらの意味や機能は説明されなかったが、説明されたところで私には理解できないだろう。しかし発生する各種の変化に他の三人が注目しているのに気づいた。この装置は大気や宇宙空間の状態はもちろん、飛行方向、他の物体の接近などを示すのではないかという印象を受けた。

私たちがすわっているベンチのまうしろにある幅約十フィート（約三メートル）の壁は堅固でがらんとした感じだが、その先の、入口のドアーと真向かいになる位置には別なチャートがあり、今述べたチャートといくらか似ているけれども或る点では異なっている。パイロットの操縦盤はまったく私の想像外のものであった。私が比較し得る限りではオルガンによく似ているけれども、鍵盤やストップ類のかわりに数列のボタンがある。小さなライト（複数）がこれを照らしていて、各ライトが同時に五個のボタンを照らすように配置してある。記憶する限りではこのボタンは六列あり、各列は六フィート（一メートル八十センチ。今後はメートル法に換算して記すことにする）の長さがあった。

この盤の前にパイロットの席があるのだが、それは一同がすわっているベンチにそっくりである。この席のすぐ横に、パイロットの操作に都合のよいように中央の磁気柱へ直結した一個の特殊な装置があった。

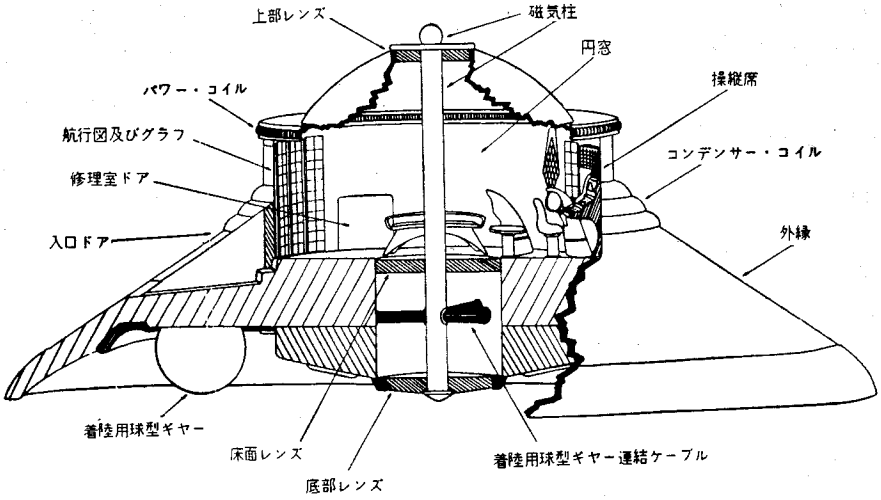
その用途について私が心中で推測しているとファーコンが確証を与えて言った。「ええ、あれは一種の潜望鏡です。地球の潜水艦が使用する機械と同じようなものです」

各種のチャートや壁のグラフなどの表面を移動しながらきらめいている、ときどき明度の変化するいろいろな光を見つめているうちに、こんな半透明の円盤が空中を飛行中に色光が変化するとしばしば報告されている理由が明瞭になってきた。しかし他にも原因がある。船体の色光の多くも、ときとして円盤をとりまく輝くコロナも、大気中に放射されるエネルギーの強度が変化するために船体の周囲で空気を光らせる結果であり、これはややイオン化に似た現象である。

船体内には暗い部分が全然ない。照明のライトがどこから来るのかわからないが、柔らかな心地よい光がすみずみまでしみ通るように思われた。この照明を正確に述べることは不可能である。白でも青でもなく、私が示し得るいかなる色でもない。むしろあらゆる色光の柔らかな混合から成るように思われたが、時折何かの色が優勢になるような気がした。

この不思議な現象を解明しようとし、驚異的な小型機の詳細な点を見きわめて吸収しようと夢中になった私は、突然かすかな動揺を感じたものの、すでに離陸していたことを全然知らなかったのである。しかし猛烈な加速度とか、スピードの劣る地球の飛行機に乗った場合に見られるような気圧や高度の変化も感じられなかった。もちろん離陸時のジャークも感じない。これは秒速十八・五マイルで太陽の周囲を回る地球の不可知の進行が全然感じられないのと同様な状態である。この種の円盤に乗ることを許された他の人たちも同じような状態に驚いている。すなわち〝動き〟というものがほとんど感じられないというのだ。しかしあまりに多くの不思議な事が意識の中に充満してくるので、実はそれらを分類し始めたのは地球へ帰ってその夜の体験を回想してからのことである。

<図1>金星の円盤の断面図



今度は足もとにある大レンズに目を移した。すると驚くべき光景が目に映った！ ある小さな町の屋根の上をすれすれに飛んでいるような気がするのだ。まるで地上三十メートルの高度から見ているように物体を識別できるのである。そのとき実は三千二百メートルばかりの高さにあって、なおも上昇中であると説明された。この光学装置は必要とあれば視界から消えうせた数十マイルの高度にありながらも地上の個々の人間を見分けて調べることができるほどの倍率を持っているということだった。

「中央の磁気柱が二重の目的を果たしています」とベンチの友が説明する。「飛行用のパワーのほとんどを供給するばかりでなく、その柱の一端はドームから上空を見るための強力な望遠鏡として役立ちますし、他の端が下方の地上を探索するのです。映像はその柱を通って、ごらんのように床と天井の二個の大レンズに投影されます」

これが電子工学的なものか、それとも他の方法によるものかは説明してくれない。倍率は自由に加減できるそうで、われわれが地球で知っているような単純な光学機械どころの段ではないのだろう。

私は半透明のドームを見上げた。パロマー山ではいつも澄んだ空気の中に手がとどくほど近くに星々が見えるのだが、この天井のレンズを通してながめると、実際すぐ頭上にあるように思われた。すばらしい天空と下方できらめきながら流れている下界を交互に見ていると、床のレンズの中に——またはレンズの真下に——通っているように見える、十字形をなして中央の柱につながっている四本の架線が目についた。

私の興味が変わったのを見て火星人が説明した。「この架線のうち三本は磁気柱から船体の下部にある三個の球にパワーを伝えます。すでにご存知のように、この球はときどき着陸装置として使用されるものです。

球は中空で、緊急着陸のときは下へおろしたり飛行中は引っこめたりできますが、その最大の目的は磁気柱からそれらに送られてくる静電気のコンデンサーとして使用される点にあります。このパワーは宇宙空間のいたるところに存在しています。その自然な、しかも集中した現われの一つが稲妻となって見えるわけです。

四本目の架線は柱から二個の潜望鏡型装置に連結しています。一個は操縦席のそばにあり、他の一個はそのすぐうしろにありますが、ごらんのとおり中央レンズの縁に近づいています。これらの装置は実際には主力光学系統の延長で、パイロットが席を離れずに外部で発生する状況のすべてを観察することが可能になるのです。これらはスイッチでオンやオフにすることができますし、自由に調整もやれます。これは二人の乗員が互いに邪魔されずに望遠鏡を十分に使用できるようにするためです」

機械設備はすべてこの室の床下と、円盤の写真ではっきり示されているように、外側のフランジ（注—外周のスカート状の部分）の下部に収容してある。私にはそのどれも見えなかったが、非常に小さな室へ案内された。これは機械類を収容しているコンパートメントの入口にもなるし、緊急修理の工作室にもなるものである。ここには極小型の溶鉱炉と、必要な器具や材料を保管するらしい二、三の戸棚があった。

この部屋の戸口から中をのぞき込んでいると、パイロットが呼びかけた。「着船用意。母船に接近しています」

この言葉は信じられなかった。円盤に乗り込んでからわずか数分がすぎたとしか思えないからだ。

ところで先刻までわれわれがすわっていたベンチのうしろの壁が固く見えたのに、今、丸い穴が出現し始めた！ それが開き続けるあいだ私は驚いて注視していたが、ちょうどカメラの絞りのようであった。まもなく径四十五センチばかりの丸窓が一つ現われた。これは私の円盤写真に見られる丸窓であることがわかったけれども、今まで少しもその形跡に気づかなかったのである。一同がはいって来たドアーと同様に、この丸窓も閉じているときは遮蔽物が人目にわからないように壁に密着していたのだ。写真を思い浮かべながら私はたぶん両側に四個ずつの丸窓があり、計八個になるのだろうと判断した。

「そのとおりです」とオーソンがうなずいて確証した。「ボタンを押すだけで全部でも一個でも開くことができます——もちろん同じようにして閉じることもできます」

着船が切迫していることをパイロットが告げたとき、火星人が言った。「帰投する状態をごらんになるとおもしろいですよ！」

母船上に実際に着陸することを予想するにつれて、私の感情は言葉であらわせないほどに高ぶってきた。つとめて平静さをとりもどそうとしているうちに疑問がわいてきた。母船はどこで待機しているのだろう。どんな方法で着船するのだろう。

ただちにオーソンがこの心中の質問に答えた。「これは昨年砂漠であなたと最初に会見したときに、あなたがた一行が見たのと同じ大母船です。今までこの位置で私たちを待っていたのです。現在の高度は地上約一万二千メートル。注意して、この小型機が着船して収容される方法を見て下さい」

宇頂天になった私は丸窓から外をのぞいて見た。すると下方に静止している巨大な黒い影を認めることができた。接近するにつれてその大きな容積がほとんど視界一杯に拡大されるとともに、広大な横腹が外側と下側にカーブしているのが見えた。円盤は非常にゆっくりと近寄りながら、やがてこの大輸送船の真上あたりに来た。船体の直径が約四十五メ

（24ページ下段に続く）

声

GAPも十数年を経て会員も多くなり、出版書もそろいました。新しい会員のなかにはGAPの初期の目的がわからない人もあると思います。出版社を設立することは良策だとは思いますが、GAPが成長して大きくなる前に、もう一度今までを振り返って、次の飛躍のためにもむしろ縮小（密度を高める）する気持で、ア氏のいうように忍耐強くあせらずに次の好機を待つべきと思います。種々の困惑・トラブルはその必要性を示唆しているのではないでしょうか。どうか身体に気をつけてがんばって下さい。（茨城県　はなわ公明）

私、日本GAP月例研究会に出席させていただいておりますが、実に意義深い事として、先生の御指導、そして諸会員の御助言をありがたく参考にさせていただいております。

こういった月一回の会合を開催し、少なくとも意識が通じ合える方々と意見を出し合うということだけでも、何らかの意味で非常に役に立つものと思えます。

〝知らせる運動〟の成果・期待というものは、GAPニューズレター機関誌を通してその資料をいただいた各人の態度・行為にかかっているわけですが、それとともにやはり月例会の力は強いと思っている次第です。大阪支部月例会の月二回開催は宇宙哲学研究を高めていくのにふさわしい事と思います。東京例会におきましても、できればそういった機会に恵まれましたら月二回開催を望んでおります私です。

（東京　丹野　広）

久保田氏との出会いにより私もより多くのものをこの手につかむことができました。私がどんなに尊いものをこの身に与えられたか、すべてが氏のおかげであることを感謝いたします。今はなおこの上なく未熟な状態を続けておりますが、必ず私もまたこの世で最も尊い人間の一人になれますよう努めてゆきます。たとえどれほどの年月がついやされても必ず立派な人間になれるようこの身に決意いたします。未来においてどこかで必ず会えることをこの身に願うのみです。たとえどれほどの年月がかかっても、これが私の最大の希望であります。

（北九州市　中村健三）

アダムスキー哲学を学び始めてからまだ一年も経っていませんが、その深遠さには目をみはっています。この教えはまさしく諸仏典、諸福音書といった珠玉を貫き通す黄金の糸に相当します。たとえば次の如くです。

＊「宇宙意識と一体化し、それに従いなさい」＝「思いを尽し、魂を尽し、心を尽してなんじの神を愛せ」（イエス）＝「ただわが身をも心をも、はなちわすれて、仏の家になげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、こころをもつひやさずして、生死をはなれ仏となる」（道元）

＊「宇宙の意識を無視する→意識にそむく行為→親のいうことを聞かなかった子供のようにひどい目にあう」＝「神にそむく→罪をおかす→神の裁きを受ける」＝「惑→業→苦」

＊「分離分裂などというものはあり得ない」＝「神は愛なり」＝「しつ有は仏性なり（一切の存在は仏性そのものである）」（道元）

神すなわち宇宙の意識の属性は愛・力・英知で、イエスは愛と力の面を、仏ダは英知の面を強調しました。またアダムスキーの教えの特色は現代性・科学性にあると思います。宇宙の聖賢の教えである仏教・キリスト教・アダムスキー哲学が三位一体として世に広く学ばれることを祈るゆえんであります。

（神戸市　浅井総一）

天の崇高、気候のおかしさを感ずるこの頃。世界の数あるニュースのなかで横井さんの話題、私は横井さんに悲しみと生命力を感じました。横井さんは「天皇のために」と言っていました。戦争の悲惨さに責任を感じ、またあの「忠誠」には驚き、「あの精神」、また違う意味であのような精神が平和を作る一つのキイのように感じました。横井さんには失礼かもしれませんが、戦争は絶対にやるべきではなく、あたりまえですが、あの事件から私は「精神」を受けました。

久保田先生には御存知かもしれませんが、「サイエンス」日本版一九七二年二月号に「不規則な地球の自転」「古代ユダヤ教と死海の書」の論文など興味深いものが載っていました。次第にアダムスキー氏に有利に、そしてわれわれ人間に喜びと平和が来そうな気がします。でもわれわれ一人一人がそのキイを持っていますね。久保田先生の御苦労には感謝致します。こんなことを言うとなまいきかもしれませんが——。よくここまでGAPや宇宙的活動をやってくれたと思います。いろいろなことがあったと思います。先生も人間ですものね。これからもいろいろな困難があるかもしれませんが、がんばってください。御健闘を御祈り致します。

—一月二十九日—

春の息吹きがひしひしと感じられる今日このごろです。先生もいろいろとお忙しいと存じます。私は今日久しぶりに母校を訪れてみました。私がいた高校は海の近くにあり、天気がよいと屋上から海が見えてとてもよい所にあります。さっそくその日海に行き、一人で海をながめていました。その海の活動たるや、すばらしいことには目をみはるものがありました。それは全くわれわれ人間に似ていると思いました。あるときはゆっくりと、あるときは激しく、自然の芸術にはわれわれ人間をはるかにこえる何ものかがあるようでした。空を私は見上げてみました。海鳥が空高く飛んでいました。自由に、彼の全生命をあらわして、大らかに、美しく、空と陸と調和して、力強く、やさしく、宇宙の英知として——。そして雲に目がとまりました。雲も勇壮に流れていました。そう、海と鳥と調和するように——。私はそこで考えました。われわれのエゴがいかに愚かであるかを。そしてわれわれ「人間」のすばらしさを。宇宙の英知を。そして今考えてみますと、もし

かしたら、あの雲を構成している原子は、昔私の髪の毛の原子ではなかったかと。そして私の肉体を構成している手の原子は昔私がケンカした友の原子を使っているのではないかと。われわれは草木やプランクトンの如き万物に自己の生命を託し、また万物すべてが互いに頼り合っているにもかかわらず、公害・不和などがあるようです。あります。でもわれわれ人間はあらゆる困難に打ち勝つというより調和するものと信じます。われわれ人間は絶対に負けないと。自分に、私に、エゴに。私も自分の弱さにあきれてしまう時がありますが、負けたくありません。久保田先生の数十年の努力や忍耐に感服しています。そしてGAPメンバーの各氏も個々奮闘し努力していることに敬意を表し、またGAP以外のすばらしい人たちにも敬服します。先生もこれからいろいろと大変と思いますが、がんばって下さい。私もがんばります。—三月十五日—

春、草木も情熱を燃やし、自己表現を活発にしている今日このごろです。久保田先生も喜びとともに御活動のことと思います。私は今年どうやら大学へ入ることができました。これも久保田先生、ジョージ・アダムスキー氏、GAPの人々、それに世界の人々の恩恵です。「どうやら」と書いたのは私があまりにも勉強ができなかったからです。学生のころ宇宙のことなどに気を取られ、大事な現実の基盤となる地球の学問をおろそかにしたせいです。そのため学校の先生や仲間の人々から、私はまず大学というところには行くことはできないと言われましたが、アダムスキー氏の哲学、ブラザーズの哲学、宇宙の英知とともに活動したせいか、入学するチャンスに恵まれました。全く驚くばかりです。受験の勉強もしましたが、それと同じくらいアダムスキー氏の哲学も勉強しました。英語・古典と、文科系の致命的な科目が非常に悪かったのです。しかし彼ら惑星の人々のように絶対に負けない精神をみならいました。そして現在痛感するのはやはり地球の学問をおろそかにしてはいけないということです。特に若いころは一方的なので、極端に言えば「極端な性向」で調子に乗ってしまったようです。宇宙的なものをつかむと勉強がいやになってしまうけれど、やはり真に宇宙的なことは「現実をするどく見抜くこと」だと思いました。それにはやはり勉強でした。大学にはすばらしい先生や友人がいるでしょう。しかし私はほんとうの大学はGAP大学だと思います。まさにGAP大学の設立を望む次第です。久保田先生もたいへんなことと思います。しかしけん命に活動し、喜びとともに生命を表現しておられると思います。これからもがんばってください。

—三月三十日—

（千葉県　田沢憲一）

久保田先生、お元気ですか。先日のGAP月例研究会に出席して大変勇気づけられました。そしてまた先生と対面でき、自己の前途の永遠を感じました。大学にも無事入学できて、自然に囲まれたすばらしい環境で勉強できると思うと本当に感謝の気持で一杯です。ぼくの大学、東京理科大学理工学部は都心より五十分の閑静な所にあって空気もおいしく、ぼくにとっては最高にすばらしい所です。下宿は林に囲まれてすごく静かで、家主の方もとても人情味があって温かい人です。すべてが全くぼくの希望通りにいった感じで、ちょっと申訳ないような思いです。本当に一生けん命勉強していきます。

想念チェックをしてから四ヵ月近くになりますが、受験期に大変乱れたことは自己の未熟を痛感させる好材料でした。また周囲の人が自分をどう評価するか気になったり、他人を軽べつしたり、親に不満をいだいたり・・・と、本当にセンスマインドの抑制だけでもまだまだ永遠の前途があります。しかし以前にくらべてエゴ想念をはっきりとらえて、対象が明りょうになっただけでも進歩だと思っています。「生命の科学」をフィーリングで読めというのは、とてもすばらしいヒントでした。でもまだうまくいきません。それらのゆるやかな進歩の中で、最近は自然の偉大さ、完全さ、そしてまた生命を与えてくださった神への感謝の気持・・・等をとても強く実感するようになりました。時々草花や樹木とあいさつをします。ぼくの勝手な推測かもしれませんが、こちらで「やあ、おはよう」と相手にささやくように思念すると、相手から何ともいえない、とてもおもしろい何かが発せられるように感じるのです。以前には味わったことのないものです。おそらく久保田先生にはわかっていただけると思いますが、言葉ではあらわせない種類のものです。そして相手（樹木）から来る何かをうまく受け取れたと感じたとき、〝万物は一体だ〟ということがとても強い実感として迫ってくるのです。しかしこの感じもいつも味わえるものではなく、不愉快な思いをしたり体の調子が少しわるかったりすると、とたんに自分と周囲が切り離されたようになります。毎日少しずつでもアダムスキー哲学への理解が増してくるたびに、そのすばらしさへ感謝の気持がわいてくるのです。本当にア氏の著書にめぐり会えたことは幸福でした。四月の月例会にはおそらく日程の関係で出席できないと思いますが、みなさんによろしく。では先生もお元気で。さようなら。

（千葉県　足立亘宏）

御訳書「テレパシー」を大変興味深く読ませていただきました。かねがね深い関心をテレパシーに抱いておりましたので、御芳書にふれる機会のおそかりしを悔む思いが致します。このむつかしい分野の本をまことに誰にもわかりやすい親切な日本語に訳して下さいました先生に重ねて感謝申し上げる次第です。—中略—はじめて御便りするのにぶしつけなおねがいを致しまして申し訳もございませんが、めったに日本へ参りません海外在住の日本人であることに免じて、御寛容のほどをおねがい申し上げます。

（パリ　吉見かおる）

先生益々御清栄の程御祈り申し上げます。小生たま出版の先生の訳書ジョージ・アダムスキー著「宇宙哲学」を読みまして深く感銘致して居ります者の一人で御座います。もう少し深く宇宙哲学を勉強致したいと存じます。—後略—（韓国大田市　劉碩炯）

日本GAP月例研究会

日本GAPは左記のとおり東京と大阪支部の二個所で月例研究会を開催して会員の向上を図っています。特にUFO関係のスライド映写も実施していますが貴重な資料をスライドで公開しているのは我国では日本GAPだけであり、希少価値が高いと自負します。都府内外近郊の方はぜひご参加下さい。

東京例会

1. 日時　毎月第一日曜日、午後一時より四時半まで。（時間厳重。途中入場も可）
2. 会場　豊島区民センター四階会議室。（国電池袋駅の東口下車。三越デパートの左横の道を奥へ奥へと行けばよい）
3. 会費　百五十円。茶菓が出る。
4. 携行品　テキストとして「宇宙哲学」を持参のこと。講師は久保田代表。

◎代表挨拶、経過報告、「宇宙哲学」研究、質疑応答、自己紹介、座談会、スライド映写の順。

✻　✻

大阪支部例会

1. 日時　毎月第一日曜日と第三日曜日の二回開催。午後一時より四時まで。
2. 会場　＊兵庫県尼崎市　尼崎産業郷土会館（阪神電車〝大物〈だいもつ〉駅〟にて下車。北側へ徒歩三分）

注意＝四月より第一日曜の例会を京都にて再開と予告しましたが、都合により第一日曜も尼崎会場で行ないます。

3. 会費　いずれも百円。
4. 携行品　テキストとして第一日曜は「生命の科学」、第三日曜は「宇宙哲学」を持参のこと。

アダムスキー哲学三大名著！

絶賛発売中

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接にどうぞ。

宇宙哲学

¥350　〒45　振替東京94804

東京都新宿区納戸町33　たま出版

生命の科学

¥420　〒55

テレパシー

¥290　〒45　振替東京2521

東京都文京区白山1—29—12　文久書林

本誌旧号

本誌バックナンバー（旧号）は次のものが在庫。部数僅少につき未入手の方は早目にご注文のほどを。送料は不要。低額切手代用にてもOK。47号まで各200円・48号以降は各250円

44号・46号・47号・48号

想念観察手帳

想念感情の観察はアダムスキー哲学実践のキイポイントであり、この実践より真の理解が生じる！

日本GAP特製の手帳を使用すれば記入が容易で飛躍的な向上が期待できる。会員必携の手帳！

¥150　送料は1冊25円・2冊55円・3冊70円・4冊85円・5冊115円

以上は日本GAPへ直接注文されたい。

編集後記

◎陽春の候、皆様にはお元気でおすごしのことと存じます。各方面からの多大なご援助により、ここに第四十九号を刊行する運びに至りました。ご支援のほどに厚く御礼を申し上げます。

◎連載中の「なぜ彼らは来るのか」は好評裏に本号をもって完結しました。いずれ一本にまとめて出版するつもりです。次号から新たに「ホワイトサンズ事件」を連載しますからご期待下さい。

◎クリシュナムルティーの哲学は独特なもので、アダムスキーを理解するのによい手がかりになると思います。「同一化」というのは盲目的な付和雷同という程度の意味ですから、むつかしく考える必要はなく気軽にお読み下さい。

◎今回は米国のGAPコーワーカー、アリス・ポマロイ女史から特別寄稿の得難い記事を掲載することができました。同女史のご好意に深く感謝する次第です。この記事によってアダムスキーもさることながら同女史の気高い人柄も察することができようというものです。

◎「英語教室」は反響が少ないために中止し、かわって「声」欄を広げて会員の方々の意見発表の場としました。場合によってはこの欄のページ数をふやすことも考えますから、ふるってご寄稿下さい。特にアダムスキー哲学の実践による特異な体験・自己訓練法等の記事を期待しています。本号「声」欄の田沢憲一氏、足立亘宏氏の体験はすばらしく、まさにア氏哲学の実践による大きな成果と申せましょう。

◎群馬県太田市に「日本GAP太田同好会」が発足しました。主宰者は久保寺信一氏で、少数メンバーながら真剣な研究を続けるとの由、県内近辺の方で参加希望の方は一応編者宛ご照会下さい。会合は毎月一回（日時不定）、会場は太田市民会館、当日会費百円。

◎去る四月二日の東京における月例研究会は、当日晴天・サクラ満開という絶好の花見日和にもかかわらず、参会者二十六名という盛況でした。会開中は終始友好的なあたたかい静かな雰囲気のなかに真剣な討論・講話・スライド上映等が続けられました。ご参加下さった方々に厚くお礼を申し上げます。なお会場はいつも豊島区民センターですが、会場用の室は毎月一定しているわけではなく月によって階を変更することがありますから、同センターに入館の際はまずフロントにある立札を見て何階の何号室かを確認して下さい。

◎GAP大阪支部の例会は四月より毎月第一日曜日の会場を元通りに京都の久世章業先生宅で再開の予定である旨を先号で予告しましたが、お気の毒ながら同先生宅の修築が長引いているために、当分の間毎月第一日曜日の例会も尼崎市の尼崎産業郷土会館で行ないますのでご注意下さい。時間・会費その他は第三日曜日の場合と同様です。このため大阪支部の例会は今後毎月二回とも尼崎産業郷土会館で行なわれることになります。

◎日本GAP製作のスライドを無料貸出しいたします。ただし冷却ファン付スライド映写機の準備可能及び観覧者数名以上を条件とします。希望者はご照会下さい。

◎数年前カナダへ渡った古山晴久氏は現在米国GAPコーワーカーたるシャーロット・ブロップのグループに合流しておられるもののようで、最近同氏からガリ版の日本語パンフレットが編者宛にとどきましたが、なかなか興味ある内容を含んでおりますものの「このパンフレットのような出版物は特にあるグループの人たちに対してのものではなく、また日本GAPとは関係なくして私自身が出すものです」とことわってあるために当方に転載権はないものと判断して内容の紹介はさし控えることにします。内容を知りたい方は直接同氏宛お申込になるようおすすめします。住所は次のとおりです。

Mr. Haruhisa Koyama
P.O.Box 55, Valley Center
California 92082
U.S.A.

古山氏のご健闘を祈る次第です。

◎近年世界GAPの一部の海外コーワーカー間でアダムスキー哲学の正統理解者（？）を自称して抗争が行なわれていて、編者はこれに関する多くの事実を知っていましたが、味方陣営側の内幕バクロは結局アダムスキー氏に対する世人の疑惑と軽べつをまねくだけであると考えて公表を控えてきました。そして日本GAPは常に中立の立場を保っていかなる論争にも巻き込まれることなく冷静かつ客観的な態度で各国コーワーカーに協力しております。誤解を受けているかもしれませんが、論争や主導権争いのための活動にならないように留意しているつもりです。ア氏の哲学を実践研究するわれわれは正誤を問題とする「学問」に没頭しているのではなく、自己発見や自己開発の方法を考えたり努力したりしているのであって、しかもそのためにアダムスキーは自身の執筆になる三大指導書（テレパシー、生命の科学、宇宙哲学）と三大体験記（実見記、同乗記、真相）という平易に書かれた偉大な遺産を残してくれたのであり、そしてそれらは国内でも各出版社の営利を度外視した理解と協力によって刊行されてわれわれの手に与えられているのですから、まずこれらのテキストの徹底的な研究と実践が先行するのであって、論争は、生まれかわった次の世で出会ったときの楽しみにとっておこうではありませんか。なぜならア氏の哲学の実践はとてつもなくむつかしくて、編者などは生涯さか立ちしても論争で優位に立てるほどの境地に達するとは思えないからです。三大哲学書の内容の深遠なること筆舌に尽くし難いものがありますが、それだけに自己開発のテキストとして申し分はなく、学習中に起こる疑問に対する解答は他人が与えてくれるのではなく、実は自身の内部の宇宙の英知から（望みさえすれば）与えられるのだそうですから、ほんとうの師は自分自身だということになり、その〝師〟に気づいてそこから解答を引き出そうとして自己のフィーリングの高揚化を図るべく努力するならば、それだけでも大仕事となってきますので、到底他人との対立抗争どころではなくなります。

◎しかし謙虚に新知識を受け入れることも大切でありますから、UFO・ブラザーズ問題に関する情報類をどしどしお寄せ下さるよう、あわせてお願いいたします。

◎柴山茂氏（姫路市）より五万円、森脇十九男氏（大阪）より二万円、想念観察手帖製作資金として某氏より五万円、京都方面と思われる無名氏より五千円、塩谷信男先生（東京）より五千円、安部雅子氏（山口市）より六千円、三浦修氏（東京）より二千円、小杉幹夫氏（千葉市）より一千円、安田正人氏（鹿児島市）より二千円のご寄付あり厚く御礼を申し上げます（一月以降四月十日まで）。（久）＊送料値上げ！

1972・4
GAPニューズレター　第49号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
東京都江戸川区篠崎六―二三―一
振替東京三五九一二久保田名儀
頒価二五〇円・送料五五円